

人はなぜオカルトを信じるのか

小杉太一郎

はじめに

この研究は、疑似科学やスピリチュアリズムなど、様々な「オカルト」的なもの、つまり社会全体では認められていないが、それを重要なものとして捉えている人々の間ではとても重要なものとして捉えられているものについて、なぜそれがその人々の間で信じられるかを、明らかにしようとするものである。社会学的に言い換えれば、オカルトを信じることは、その人にとって、どのような「機能」を果たすのかということについて、考察をしていく。

そして、なぜ「オカルト」というものが信じられたのかを明らかにしていく為の調査手法として、30年以上前から刊行され、「オカルト」を象徴するものともされている、オカルト雑誌『ムー』の通時ドキュメント分析を行う。

目次

はじめに

第1章 「オカルト」的なものについていかに研究するか

一. 先行研究

1. 社会学以外の研究

- ルポタージュ
- 心理学
- 精神医学
- 民俗学・文化人類学

2. 文化研究

3. 宗教研究

- スピリチュアリズム研究
- カルト宗教研究

二. 「オカルト」を信じるとはどういうことか

1. 社会学における『信じる』ということ

- 社会学における「信じる」ということ
- 「世俗化」と「信仰」の変化
- 社会システム理論における「宗教」

2. 「オカルト」の宗教性と非宗教性

3. 矛盾を受け入れ可能にし、それを再生産する構造

三. この研究の論点

1. 先行研究の整理

2. この研究で明らかにすること

第2章 この研究はどのような研究か

- 一. 研究方法について
- 二. 分析対象について
- 三. データ収集の手順と集めたデータについて

第3章 雑誌のドキュメント分析

- 一. 雑誌構成
- 二. 記事の分析
 1. 文章構造について
 2. ジャンルの推移
 - 80年代
 - 93年
 - 98年
 - 2000～04年
 - 08年
- 三. 読者投書欄の分析

1. ペンバル募集欄
 - 80年代
 - 93年
 - 90年代後半
 - まとめ
 1. 1958～62年生まれ世代
 2. 1963～72年生まれ世代・女性
 3. 1963～72年生まれ世代
 4. 1973～77年生まれ世代
 5. 1978年～生まれ世代
2. 投書分析
 - 83年
 - 87～93年
 - 98年～2000年
 - 2004年以降

第4章 考察

- 一. どのような人が『ムー』を読んできたか
 1. 1963～72年生まれ世代・女性
 - 80年代における若年層女性特有の困難さ
 - 「ありのままの私」を肯定するものとしてのオカルト
 - なぜ彼女たちのオカルト信仰は一過性のものに終わったか
 2. 1963～72年生まれ世代
 - 「生き方提言系」投書の背景にある生き方不安

- オウム事件の影響とデータベース消費化

3. 1973～77年生まれ世代

4. 1978年～生まれ世代・

5. 1958～62年生まれ世代

二.それぞれの「オカルト信仰」の相違点と共通点

三.ここから何が言えるか

1. 「オカルト」的なものを信じるそれぞれの理由

2. 先行研究における考察との違い

第5章 まとめ

一.結論

二.提言

三.今後の課題

おわりに

参考文献・URL

第1章「オカルト」的なものについていかに研究するか

一.先行研究

オカルトや、それを信じる人々については、その奇異さが人々の関心を集めてきたため、多くのルポタージュなどが書かれ、また社会学に限らず、心理学・精神医学・民俗学・文化人類学など、様々な学問分野で研究がなされてきた。この節では、社会学以外における研究を一通り紹介したあと(1.社会学以外の研究)、オカルト文化全体を一つの文化として考えた研究と(2.文化研究)、個別のオカルト信仰を宗教現象として考えた研究(3.宗教研究)についての研究に分けて紹介する。

1.社会学以外の研究

- ルポタージュ

ルポタージュにおいては、例えば『トンデモ本の世界』(と学会[1995-1999])のように、オカルトやニセ科学(「科学」であると述べながら、実際は根拠となるデータの詳細が明らかにされなかったり、反証することや批判することが不可能だったりするもの)についての本を面白くおかしく紹介したものや、科学者の立場からそれらを批判したもの、また、『カルト資本主義』(齊藤[1997-2000])のように、企業や官庁などがオカルト的なものにはまっていることを告発するものなどが書かれてきた。

そしてその中で、「経営側がオカルトを利用して労働者側を良いように搾取しようとしている」という主張がなされたり、「人々に不安感があるから、『神』などの確かなものを求めたがる」という説明もなされたりしている。しかし一方で、それらの説明には、なぜオカルトではない日常に比べてオカルトは「確か」と言えるのかという疑問が残る。普通に考えれば、目に見える自分の家族・友人と、目にはあまり見えない「超能力」とか「予言された運命」を比べた場合、普通に考えれば明らかに前者より後者の方が確からしいものに思える。だがそこで後者のようなもののほうが「確からしい」と思えるのは一体なぜなのか。

自然科学者からはオカルト、特にニセ科学などの科学に似せたオカルトに対し、「ニセ科学は科

学に似せてあるために、科学が持っている権威や期待感を身にまとうことが出来るから」という説明がなされ、「科学への期待感」というものがオカルト信仰を構成する重要な要素であることが示唆される(菊地[2004]、菊地は「オカルト信者はオカルトを科学とっていないだろう」と述べて、オカルトとニセ科学を区別しているが、この論文ではどちらも「社会全体では認められていないが、それを重要なものとして捉えている人々の間ではとても重要なものとして捉えられているもの」と認められるとし、「オカルト」的なものとして扱う)。しかし一方でそれらの説明は、そもそもなぜ人は「科学らしいもの」を求めるのかという問いには深くは踏み込んでいない。例えば菊地は「水からの伝言」という、「水にきれいな言葉を伝えるときれいな結晶が生まれる」という主張をニセ科学の一例として取り上げ、それが教育現場で教えられることを批判するが、しかしではなぜ、「汚い言葉を使っ

てはいけません」という道徳が、そのような科学的な装いを帯びなければ教えられなくなっている(または、そのように教師が思い込んでいる)のだろうか。

またそのような外から見たルポタージュの他にも、実際にそのようなオカルトを信じてしまうような状況、要するに新興宗教の内部に潜入したり自己啓発セミナーを体験したりして、オカルト的なものへの信仰を体験してみる、そんな体験ルポタージュも存在する(吉峻[1990]、米本[1997])。しかしそのようなルポタージュは、新興宗教や自己啓発セミナーの現場に潜入して、そこで起きた自分の心の動きを説明するが、それは「自分がいかに騙されたか」という心理学的説明に留まっていることが多い。

● 心理学

「人がなぜオカルトを信じるか」という問いを直接提示している研究としては、心理学、特に社会心理学における研究が多い。例えばなぜ占いや予言を信じるのかということについて、人は曖昧なことを言われると自分の想像でそれを補完して、結果正しいことを言われているように錯覚するというバーナム効果や、偽物の薬などでもそれを本物の薬と思い込むことで効果が出るというプラシーボ効果などの概念を用いながら、人がなぜ超能力とか疑似科学とかを現実と錯覚するかを説明したり(菊地[1999])、そのようなオカルトを信じ込みやすい人々がどんなパーソナリティをもっているかについて、大学生に対するアンケート調査などによって研究がなされている(太田・吉川[1998]、坂田・岩永[1998])。この内アンケート調査においては、「科学や常識で説明できないこと」があるということ自体は多くの大学生が信じているが、具体的な事象、例えば「先祖の霊」、「ネッシー」、「超能力」などということを信じている率は20～30%程度であるということ。また、そのような超常現象を信じるのに関係する因子としては「科学への信頼度」ということが挙げられることが分かってきたが、これについても、一概に関係しているとはいえず、相関が読み取れないとする調査結果もある。

これらの研究、特に超常現象などのオカルトに興味を持つ人がどんなパーソナリティを持つかということについての調査結果から分かることとしては、オカルトを信じやすいということは若者全体の傾向というよりは、あくまで一部の傾向であるが、しかし一部はそれらのことを強く信じていることや、ただしその信じ方は一枚岩というわけではなく、例えば科学への態度一つ考えてみても、「科学」ということに対して親和的であるか敵対的であるかということは、その信じるオカルトの様相によって様々であり、一概には言えない、といったことが挙げられる。

しかし一方で、では人々がオカルトを信じる時、それがその人にとってどのような機能を果たすも

のなのか。ということについては、心理学的な研究では分からない。例えば、将来に対する不安を持つ人々がオカルトと親和性が高いという研究もあるが、では不安を解決するためにオカルトがなぜ必要となるのか。また、オカルトを信じない人と信じる人を比べて、オカルトを信じる理由を見つけようとする研究手法では、ではオカルトを信じない人は本当にその必要が無く、オカルトのようなものを現実とみなすような思考様式がないからオカルトを信じないのか、もしくは、ただオカルトを信じるような機会に遇わなかったから信じていないだけなのか、という問いには答えられない。

● 精神医学

「オカルト」を信仰する人々の中には、幽体離脱や超能力などの、いわゆる神秘体験がオカルト信仰の引き金になったと主張する人が居る。そのような神秘体験については、精神医学の観点から、そのような体験が如何に生じ、そしてそれらが如何にその信じる人の精神を操作、つまり「マインドコントロール」していったかについての研究がある(高橋[1997])。

それらの研究によれば、離人感や多幸感というのは別に特別な超能力を使わなくても、身体を操作したり薬物を使ったりすることにより神秘体験は簡単に作り出せるらしく、しかしそのような体験について「これは神秘体験である」という解釈枠組みしか持ち得ないような状況に追い込むことによって、洗脳が完成し、信者が生み出されるという過程が、カルト宗教信者の入会過程などに見いだせるとある。

しかし一方で、そもそもなぜ一旦神秘体験を経た後、人々はその神秘体験を解釈しようとするのかという問いは、マインドコントロール論にはない。

● 民俗学・文化人類学

上記のような統計や心理モデル・精神医学を元にオカルトについて論ずる研究に対し、実際にオカルトを信じている人々にインタビュー調査をしたり、オカルト関係のメディアを分析したりして、具体的な「オカルト」がどのように流布され、人々に信じられているかを調べることによって、人がオカルトを信じる仕組みを解き明かそうとする研究もある。

例えば、霊が見えるという女性たちにインタビューして、彼女らが「靈感」を得るに至った過程にどのような特徴が見られるか、また、彼女らはその「靈感」をどのように周囲にアピールしているかを調査した研究がある(近藤[1997])。それらの研究によれば、そのような「靈感」をアピールする女性は、芸術系の専門学校・大学や小説家・漫画家など、ある種の「個性」を要求される場に多く、「霊が見える」ということを、一種の「他の人とは違う私」アピールとして使っているケースが多いらしい。

また、オカルト雑誌などの文通欄に数多く掲載された「前世の仲間」(80年代末頃によくみられた、前世において自分は悪と戦う戦士であり、そしてその戦いは現世においても続いている。だから前世において仲間だった人を探さなければならないという内容のオカルト信仰)を探すメッセージを分析したり、実際にそのような前世の仲間を捜す人々にインタビューしたりした調査もある(浅羽[1991]、新山[1990])。それによれば、そのような「前世の仲間探し」の裏にはファンタジー的な物語が存在し、そしてその物語の重要なキャラクターとして自分を規定して(例えば、自分は「戦士」であるという主張は多く見られるが、「ごく普通の農民」であるとか、「一介の兵士」であったという主張はほとんどない)、その様に自分が重要な人物であるという空想をロールプレイングすることにより、自分が特別な存在であると承認してもらいたいという欲望が、前世探しの裏にはあると

いう。そしてその裏には、誰もが存在するだけで価値ある存在であるというナルシズムを、これまでの社会では立身出世や職人として大成することにより補ってきたが、近代化が飽和点に達して成熟社会になった現代においては、そのような社会性を伴った成熟が出来なくなり(職業においても、産業化社会においては誰もが替えの効く存在でしかないし、また経済成長も終わったため、立身出世のチャンスも少なくなる)、そのために若者は虚構の世界で価値ある存在であると承認してもらおうしか、自らのナルシズムを満たす手がないうという社会的背景が存在すると研究者は主張する。

そして他にも、「口裂け女」や「トイレの花子さん」、「人面犬」など、人々の間で流布される様々な都市伝説を分析した研究もある(大塚[1989-2001])。その研究によれば、これらの噂話には、いずれも自分たちの身の回りにある場所・モノに、自分たちの世界とは全く違う世界、つまり「異界」を見出し、それにより、この決まり切った息苦しい自分たちの日常の社会システムを攪乱させようとする意味があるのという。しかし一方で、それらの噂話は、ギャグ化され笑い話になることによって、システムに取り込まれる。例えば、最初は子どもたちを連れ去っていく怖い存在だった「トイレの花子さん」が、いつしか子どもたちを助けてくれるキャラクターになったように。そのような行為により、システムは恒常性を維持するという様に。

これらの研究はオカルトを信仰する人間が、それを彼らが「選び取っている」という観点から考察している。しかし一方で、それらの研究は個人の意識の源泉をいきなり社会全体の状況に結びつけているが故になぜ同じ社会にいるある人がオカルトを信じて、また別の人はオカルトを信じないのかということが説明できない。

2. 文化研究

オカルトを一つの文化として捉え、そしてその文化がどのように変遷していったかということの研究することにより、そこから社会全体の変化を考察しようとする研究は多数存在する。

日本で今あるような「オカルト」的なものが流行し始めたのは、およそ1970年代頃からと言われている(金子[2006])。もちろんそれ以前にも、今から見れば「オカルト」と呼ばれるような事柄、例えば千里眼であったり神隠しであったりと言われるような事柄はあったが、それは「インチキ」などであって科学によって説明できるものであるか、さもなければ「霊」によるものであり、常人とはあまり関係ないものとされてきた。

しかし1960年代末から70年代に掛けて、例えば「エクソシスト」、「ゲゲゲの鬼太郎」、「恐怖新聞」などオカルトをテーマにしたサブカルチャーや、UFO・超能力・ノストラダムス・心霊現象などの事柄が多くの人々の関心を集め、「オカルトブーム」と言われるような現象が起きた。

この「オカルトブーム」の特徴としては、それまでの土着の民話などとは違い、「マスメディア」がその流布に大きく関わったということだとされる(野村[2006]、一柳[2006])。もちろん、流布される情報のテーマには、海外から来た超能力者などの、新しく入ってきたものもあれば、怪談や地方の因習など、日本に昔からあったものもある。しかし重要なのはそのようなメッセージがマスメディアを通じて人々に(再)発見されたということである。それによって、例えば東京の住民であってもイギリスのネス湖にネッシーという怪獣が居るとか、四国の八十八カ所を逆から回ると死者をよみがえらせることが出来るというようなことを知った。

そのようなオカルト文化が流行った背景には、科学とか「成長・進歩」といったものに対する不信感が当時社会に広まっていたことが挙げられるという。つまり、それまでは高度経済成長により、ど

人々が豊かになっていき、そして世の中の色々な問題も経済の発展・科学の進歩により解決できるとされてきた。だがその経済の発展や科学の進歩自体により、公害問題や核戦争の危機など、様々な問題が発生してきた。そんな中で人々は科学や経済発展に対し不信感を募らせ、科学で説明できないとされる事柄などに関心を持つようになった、という説明である。

しかしその一方で、確かにそのような関心は、科学や経済発展と言った、今までの「社会」に対する疑いであったのだが、しかしそれ故に、その解決もまた、社会的になされるものであった。例えば、ノストラダムスが人間の環境破壊によって人類が滅亡すると予言としたとされても、それはそのようなことを知った人々が、「科学だけでは解決できない大切なもの」もこの世にはあると考えて行動することにより、回避できるものであり、また、回避しなければならないものとされたのだ。そこでの主語は「社会」であり、この社会がどうなるのか、私たちはどうするべきなのかということが、オカルト文化の主題だった(大島[2006])。

そのような状況が変わってきたのが80年代である。80年代に入っても70年代からのオカルトブームは相変わらず継続していたのだが、その中身は大きく変わってきた。例えば、それまでのオカルト文化とはあくまでマスメディアによって供給されるものであり、人々はそれを享受する受け手でしかなかったのだが、80年代になってくると、例えば「オカルト研究部」などというようなサークルが各地に作られたり、心霊写真を見つけたりこっくりさんをやるということが流行し、ごく普通の女性学生の「実は幽霊が見える」などというようなことを述べたりするようになっていった。つまり、それまで受け手でしかなかった人々が、オカルト文化を自分たちの行動に生かして、「実践」するようになっていったのである(飯倉[2006])。

そしてそのような中で注目される内容も変わってきた。例えばサブカルチャー作品などを見ると、それまでは例えば『デビルマン』や『日本沈没』など、終末自体を描く「終末もの」と呼ばれるジャンルが大きな勢力を占めていた。しかしそのような作品が一旦飽和すると、今度はそのような「滅亡」、「終末」を所与のものとした上で、それが起こった後の世界、つまり「終末後の世界」の中で、人々がどのように生きていくかを描く作品が増えていった。また、オカルト的な「超能力」、「幽霊」、「妖怪」、「宇宙人」などといった概念が一般化するにつれ、そのような概念がごく普通に日常に存在するような、そんな光景を描くコメディ作品なども多く登場した(宮台[1993])。

このような変化に対して大澤[1996]は、見田宗介の論文を紹介しながら、社会が「理想の時代」から「虚構の時代」へと変化していったことを指摘する。「理想の時代」とは「現実」を規定するもの(「反現実」と呼ばれる)に「理想」が提示され、そしてその理想に向かって「現実」を改善していくとする時代である。よってそこでは社会全体が進歩していくことが求められるし、オカルト文化もまたそのような社会が進歩した先にある理想を提示するものだった。しかし「虚構の時代」においては、そのような「現実」の先にある「理想」を目指すのではなく、「現実」ではない「虚構」こそ重要なものとされるようになり、そしておのおのの個人はその「虚構」にのめり込んでいくが、それは現実の全否定でしかありえないため、オカルト文化は終末論へ変化していくという。

3. 宗教研究

宗教社会学においても、オカルトは重要なテーマだった。特に新興宗教などが精神世界への関心を強め、既存の宗教とは違った形で人々の支持を集めているというのは、宗教社会学にとって極めて重要な関心事だったのだ。

そして、そのような研究の際に対象とするものを規定するとき、宗教社会学においては主に「カルト宗教」と「スピリチュアリズム」という二つの対象が「オカルト的」なものなかでも特に注目されるべきものとされた。

もっとも、カルト宗教研究の側においては「スピリチュアリズム」もまた「カルト」の一種なのだと指摘するケースが多く、それに対してスピリチュアリズム研究の側は、「カルト」ではない「スピリチュアリズム」もありうると主張している。つまり、それぞれの研究は相互排他的なものではなく、むしろこれらの研究対象は重なる場合も多いといえる。

● スピリチュアリズム研究

スピリチュアリズム研究における主な関心事としては、それまでの既存の宗教と、80年代ごろになってきて生まれてきた新しい宗教（新新宗教などと呼ばれる）、あるいはそれらともまた違うように見える、「宗教」を名乗らないけれど何らかの形で「超越性」に触れようとするスピリチュアリズムなどは、一体何が違うのか。そして、そのような違いは一体なぜ生じたのかということが挙げられる。

そしてそれら研究において重要な要素とされたのが「組織性」の概念である。これまでの宗教に付随していた、宗教団体などの組織への嫌悪が、人々をスピリチュアリズムへ誘っているのではないかという主張だ。（島藺[2007]、大村[1996]）

しかし一方でそれらの研究に対しては、そのようなスピリチュアル像の多くは、実は一般市民が求めているスピリチュアリティとは乖離しているのではないかと、また、「スピリチュアリズム」というのをあまりに単一的に捉えているのではないかと（本当はもっとそれぞれの階層などによって内容が異なってくるのではないかと）などという批判もされている。（櫻井[2009b]）

また、ニューエイジショップや精神世界についての情報誌を媒介して募った人々に対するインタビュー調査では、精神世界に関心を持つきっかけとして、鬱病などの心身疾患や仕事における自己実現など、「自己」に関する危機があったことや、最初から自己や世界に対する問いがあるのではなく、社会や世界から引き離されたという剥奪感の中で、その様な自己や世界といった精神世界への問いが生まれてくるということ。そして人々はそのような精神世界において、存在感の肯定と安らぎを、同じ精神世界に関わる者同士での人間関係により得るが、それは一方で「地に足のついてない」ものであるとも実感されていること、などが明らかになった。（櫻村[1998]）

そして、そのような「自己」に関する危機の背景には、「自己決定権」の増大と、それに対して、それを支える近代の無意識的衝動の欠如があるのではないかと、という風な分析もなされている。（櫻村[2003]）

● カルト宗教研究

何をもってカルト宗教とするかどうかというのは、宗教社会学においては特に微妙な問題であり、このような定義をする宗教社会学者はあまり多くない。しかし一方で、「カルト問題」というような問題が生じている以上、それに対処しないというのもまた宗教社会学の役割を果たしてないのではないかとこの考え方から、敢えてこのような定義をするものもある。（井門[1997]）

そのような視点における研究の具体例としては、カルト宗教の教義や、脱会者からの聞き取り調査などから、なぜそのようなカルト宗教を人々は信仰するのかを明らかにしていく研究などがある。そしてそこでは、恋愛関係の恐怖などの元々その個人にあった嗜好、勧誘の際に作られる閉鎖的な関係などの人間関係の形、そして教祖への属人的な信仰を集める教義などという多面的な要因が、

カルト宗教の信仰には関係しているということがいわれている。(櫻井[2009a])

二、「オカルト」を信じるとはどういうことか

ここまで見てきたように、オカルトについては様々な先行研究が存在するが、しかし一方でそれらの研究はそれぞれの学問理論や、独自の解釈枠組みによって研究され、そしてそれ故に、それぞれが導き出す結論もバラバラであり、「オカルトを信じる理由」についても、様々な異なる、時には反証し合うような解釈(ex.「科学がより強く信じられているからオカルトは流行する」/「科学文明に対する不信感がオカルトへの信仰につながっている」)がなされているというのが実情である。

これらを整理するために、この章では「オカルトを信じる」ということが、そもそも一体どういう行為なのか整理し、そして、それが一体どのような原因によって生み出され、そして維持されるのかを一つの理論として提示する。

そのためにまず、「信じる」という行為について、それがいかなる原因によって生じ、どういう機能をもつものなのかを考えてきた、社会学の理論を整理する(1.社会学における『信じる』ということ)。そして次に、それがオカルトに対してどの程度まで通用するかを考え(2.「オカルト」の宗教性と非宗教性)、最後に、オカルト信仰がいかなる原因によって発生し、そしてそれがどのような構造によって維持されるか、理論枠組を提示する(3.矛盾を受け入れ可能にし、それを再生産する構造)。

1. 社会学における『信じる』ということ

● 社会学における「信じる」ということ

社会学の祖の一人であるデュルケームはオーストラリアやオセアニアの原住民におけるトーテミズムを研究した(デュルケーム、古野訳[1941-1975])中で、宗教というものを『聖／俗』という認識枠組の信仰と、それを維持する儀礼体系」と定義した。当時宗教の始まりがどんなものであるかを論ずる仮説には、「アニミズム仮説」と「ナチュラリズム仮説」というものがあった。アニミズムとは先祖信仰のことであり、ナチュラリズムとは自然信仰のことで、どちらにしる、自分たちの社会の外にある大きな超越的力があり、そしてそれへの畏れが宗教を生んだという仮説である。しかしそれに対してデュルケームは、彼らが信仰している先祖や自然存在のなかには、人々の生活に何の影響を実際には及ぼしそうな無害なものも多くあることから、それらの仮説を退け、「トーテミズム」という概念を示した。

「トーテミズム」とはつまり、何か実在する力があり、そのような力があるから人々は宗教を信仰するのだと説明するのではなく、何か一つの、それ自体では無意味な象徴を社会全体で信仰し、それについて儀礼を行うことが、社会を統合する機能を持つが故に、人々は社会を統合するために宗教を信仰するという説明である。

また、同じく社会学の祖の一人であるジンメルは『社会学の根本問題』(ジンメル、清水訳[1979])の中で宗教への信仰は「価値合理的行為」と述べている。「価値合理的行為」とはつまり、その行為をすること自体がその人にとって価値を持つ行為であるという考え方だ。故にそのような行為は、「目的合理的行為」のように結果によって否定されることはない。例えば「お金を儲けるために働く」という行為は、もしそれによってお金を儲けられなかったら行為自体に価値がないものとみなされるが、「神を信じる」という行為は、それによっていかなる結果が生じようとも、「神を信じる」という行為自体に価値があるものと見なされる故、否定されない。

つまり、社会学の考え方によれば「宗教への信仰」とは、その信仰により何か良い結果が生まれ

るから生じる行為ではなく、「宗教への信仰」が示されることに社会を統合する機能があるが故に生じた行為であるされる。そしてそれ故に「宗教への信仰」においては儀礼が重要視される。なぜなら儀礼によって「人々に宗教が信じられていること」が可視化され、それ故に「その宗教は信じる価値がある」と人々に思われるからである。

● 「世俗化」と「信仰」の変化

しかし一方で、社会学が生まれた時代は「世俗化」が進んでいった時代でもあり、それはつまり、宗教がどんどん社会の表舞台から姿を消し去っていつているように見える時代でもあった。

ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（ウェーバー、大塚訳[1989]）の中で、近代資本主義の成立にはプロテスタンティズムの貯蓄を奨励する禁欲倫理が大きな役割を果たしたが、しかしその一方で成立当時においては存在していたそのような宗教的倫理は資本主義が発展していく中でどんどん薄らいでいったと述べていた。この様に、近代になり資本主義が発展していくなかでそれまでの宗教的禁欲倫理が薄れ、更に科学の進歩と教育の発展によりそれまでの宗教が述べていた神話が否定されたり、工業化により伝統的な教会のコミュニティが解体されたりしていく中で、宗教の役割も徐々に衰退していくのではないかとされた。これを宗教衰退論と呼ぶ。

しかしそれに対し、確かに社会の表舞台から宗教は消え去っている様に見えるが、しかしそれはあくまで宗教が「公的」なものから「私的」なものへと、その形態・機能を変化させているだけに過ぎず、宗教的なものへの信仰自体は以前人々の心の中にあるとする、宗教不滅論を展開する研究者もあらわれた。その代表が、ルックマンである。

ルックマンは、『見えない宗教』（ルックマン、赤池・ヤン訳[1976]）の中で、確かに教会といった既存の宗教への参加率は低下したり、あるいは教会が宗教性を失い単なる生活コミュニティの場となったりしているが、しかしそれはあくまで「教会」という宗教の一つの特殊な有り様が衰退しているだけであって、宗教性そのものが衰退していつているわけではないと主張する。ここでルックマンは「宗教性」を、「個人がいかに生きるべきかを示す『究極的』世界観」と定義する。そしてその「個人がいかに生きるべきかを示す『究極的』世界観」が、これまでは教会といった公的な場で決定されていたのが、現代では人々がそれぞれ自ら選び取り、私的に信仰するようになっている、その変化こそがまさに「世俗化」なのだと主張した。

● 社会システム理論における「宗教」

しかし一方でそのような議論は、宗教というものを「人は何のために生きるか」という価値観の問題とすることにより、「宗教性」というものが人間のなすあらゆる行為に認められてしまうのではないかという批判を招いた。例えば、ルックマンの議論に則れば、「自分は家族のために生きる」といったマイホーム主義のようなことまで、宗教の一つであるという風になってしまう。

そんな中で、「教会」のように公的に制度化された宗教のみを宗教として認定するのではなく、かといってあらゆるものに宗教性を認めるのではない、新しい宗教の概念規定が求められるようになった。そこで登場してきたのが社会システム理論である。

社会システム理論において宗教の機能は「前提を欠いた偶発性」を無害なものとして受け入れ可能にすることだとされる（宮台[2004]）。「前提を欠いた偶発性」とは「別のようでもありえたのにこうなっていること」であり、例としては偶然の出会い・不慮の死・突然の病などの「個別の出来

事」や、科学法則、道徳律などの個別の出来事を処理する「処理枠組」などが挙げられる。そして社会システム理論の考え方では、宗教の機能はどの宗教でも同じであり、にも関わらず宗教が時代や場所によって様々な異なった有り様を示すのは、一体何が「前提を欠いた偶発性」とみなされ、そしてそれがどのようなメカニズムで無害化されるかということによる変化だとされる。

そして現代においては、「前提を欠いた偶発性」とは個人に対して起こる問題であり、それを解決するメカニズムには「個別的問題設定」と「縮約的問題設定」の二つがあるとする。「個別的問題設定」とは、「前提を欠いた偶発性」にそれぞれの個人における「個別の出来事」をおくもので、それぞれの出来事(ex.病気になった、好きな人にふられた、テストの点数が悪かった……)に対しそれぞれの超現実的前提(ex.水子の祟り、星座の相性が悪い、バイオリズムが最悪だった……)を事後的に設定するというメカニズムである。それに対し「縮約的問題設定」とは、それぞれの個別の出来事にそれぞれ超現実的前提を設定するのではなく、それらの個別の出来事全てを説明しうる超現実的な「処理枠組」を設定するという方法である。この処理枠組みには具体的に「自分がそうになっているから」と「世界がそうになっているから」という二つの処理枠組が設定される。

このように社会システム理論においては「前提を欠いた偶発性」をいかに超現実的な前提によって処理するか、ということが宗教の問題であると、宗教の機能を定義する。そして、「前提を欠いた偶発性」を超現実的な前提によって処理することにより、人はやっとなら社会の中で「主体的」に行動する条件を整えられるのだ。

2. 「オカルト」の宗教性と非宗教性

それではこのような宗教についての社会学の議論がオカルト信仰に対してどこまで通用し、そしてどこからはオカルト独自の議論が必要となるのだろうか。

まず、社会学における宗教論の大前提としてあるのが、宗教とは「聖なるもの」への信仰であるということだ。これはつまり、現実の生活社会とは隔絶した所にある「何か」を認め、それに超越的な力を信じるのが宗教信仰であるという考え方だ。

これはオカルトにも適用できるだろう。もちろん、オカルトを信じる人は主観的にはそのオカルトは「現実」である。しかし、それは一般に認められることではないからこそ、それは社会から「オカルト」と定義され(もしUFOや幽霊が普通に頻出していたら、きっとそれらは「オカルト」とは呼ばれないし、古代文明や陰謀論にしても、それは日常生活とはとりあえず関係ない)、そして、それが日常的でないからこそ、それを信じる人は、熱心にそれを「信じる」という行為を取るのである(存在が自明なものについては、わざわざそれを検証したり、それを信じることはしない)。

しかし一方で、それがデュルケームの言うように社会全体を統合する機能を果たしたり、あるいはルックマンの述べているようにその人の究極的価値観を与える役割を果たしているかということ、そうとは言えない場合もあるようにも感じる。オカルトは、教会のような生活上の組織性を持ち得ないし、何か外に「聖なるもの」を認めても、それが具体的にどんなものかという教義については統一した見方を持たず、むしろ他人と違った見方をして、自らを他人と差異化するというようなことも多く見られる。そして、例えUFOを信じていたり超能力や心霊を信じていたとしても、大多数の人においてはそれは自らの趣味の一部である。もちろん中にはカルト教団の信者のように「終末論」こそが自分の行動全てを貫く指針となったり、前世少女のように自分が生まれてきた意味を直接オカルトに求めるものも居る。しかし多くの人々にとって、オカルトとは自分の人格の一部をなすものであり、もち

ろんそれはその人にとっては“ある程度”重要ではあるのだけれど、それが否定された途端に自分の人格が全否定されるようなものではない。

自分の人格全てを一つのオカルトに頼るか、それとも人格の一部をそれぞれのオカルトに頼るかということは、むしろ社会システム理論における「個別的問題設定」と「縮約的問題設定」の違いに類似しているだろう。しかしここで問題となるのが、ではオカルト信仰においては「前提を欠いた偶発性」というものは見られるかということである。「前提を欠いた偶発性」とは「別のようでもありえたのにこうなっていること」だが、オカルト信仰において重要視されるのはむしろ「こうなるはずはなかったのにこうなっていること」、つまり「前提に反する必然性」では無いだろうか。例えば宗教信仰の場合は「私はどうしてここにいるのか」という「前提を欠いた偶発性」に対し「神様がそこにいるべき宿命を与えたから」という答えを出したり、「世界がそのようであるから」、「私がそう望んだから」というような宿命論を提示したりする。しかしオカルト信仰の場合は、そもそも「私はどうしてここにいるのか」というような曖昧な形では問いは出されない。むしろ、例えば離人体験のように、「私はここにいるはずではないのになぜかここにいる」というような、具体的な形で問いが出され、それに対する答えが求められる。オカルト信者が「私が信じるオカルトは宗教ではなく科学だ」と主張する理由もそこにあるといえよう。つまり、オカルト信者にとって宗教とは「証明不可能なことを信仰する」ことであるが、それはオカルトとは言えず、オカルトは「証明可能なことを証明する」、科学の一つなのだ。オカルト信仰とは、「前提に反する必然性」に対し、別の(当事者にとっては現実的で、社会においては超現実的な)前提を見つけ出そうとする行動であるといえる。

そして更に、オカルト信仰においては先行研究で示されたとおり、「マスメディア」というものが大きな役割を示している。教会志向型ではない宗教というものはあり得るものであり、であるが故に宗教についての社会学理論は「教会」というような本人たちの儀礼から離れて宗教概念を抽象化する必要があったが、オカルト信仰についてはむしろメディアを通じて流布しないオカルトというものはありえず、故に社会システム理論における宗教より限定的に定義した研究が可能であり、デュルケムがトーテミズムを分析した時と同じような形で、儀礼と信仰の相互循環というものをオカルトの研究視点に含めることが可能になるだろう。

3. 矛盾を受け入れ可能にし、それを再生産する構造

このようにオカルトは宗教と似たような側面がある一方で、宗教とは明らかに違う側面もあることが明らかになった。これを踏まえた上で、「人はなぜオカルトを信じるのか」という問いを検証するための、理論枠組を提示する。

まず、オカルトとは「前提に反する必然性」を受け入れ可能なものにするものである。これは、単純に言えば「矛盾」を受け入れるということである。この「矛盾」には様々な物が考えられるが、重要なのはここで言う「矛盾」とはあくまで当事者にとっての受け止め方であるということである。例えば「自分は空飛ぶ円盤を見たのに世間では空飛ぶ円盤なんて存在しないとされている」という矛盾の場合、客観的には「その人は鳥とか飛行機を空飛ぶ円盤と見間違えたのだろう」という風に別に矛盾ではないのだが、しかし当人にとってはそのような解釈は受け入れられずあくまで矛盾なのである。そして矛盾を解消するために「空飛ぶ円盤を隠す陰謀を企んでいる組織が存在する」という超現実的な前提が信じられる。

そして更に、オカルトはそのような明確な「矛盾」から出発し、それを受け入れ可能なものにしな

がら、しかしそうやって受け入れ可能なものにする事によって、また新たな「矛盾」を生みだし、それを受け入れ可能にするためにまたオカルトへの信仰を要請するという、循環構造を生み出す。

これは一般的な宗教の場合とは大きく異なる。宗教における「前提を欠いた偶発性」の場合は、それは超現実的な現実を前提として要請するが、しかしそれはあくまで現実を補うものであって、現実と真っ向から対立はしない。例えば「何もしていないのに病気になったのは水子供養を怠ったせいである」という場合、水子の祟りというのは確かに社会では受け入れられない前提ではあるが、しかしそれは明確に否定もされない。なぜなら「何もしていない」という風に前提が欠かれている以上、それはそもそも現実的に説明することが不可能であり、「水子の祟り」ではないとしても、では一体何で病気になったのかは説明できないからだ。

ところがオカルトの場合はそうではない。オカルト信仰の場合は空飛ぶ円盤の例えでみて分かる通り、現実的にも説明は可能である。ところがそこでそのオカルトを信じる当人は現実的ではない説明の方を選ぶ。そこで、現実的な説明を取る「反オカルト」と「オカルト」の意見が食い違うという、また別の矛盾が生み出されるのだ。

もちろん、もしこのようなオカルト信仰がその人の内面でとどまっている限りは、そのような矛盾があったとしてもそれは当人にとっては気づかれないだろう。だがオカルトというものがメディアを前提として存在しているのならば、それは社会に提示され、そしてその反作用として「反オカルト」を生むだろう。そしてその「オカルト」と「反オカルト」の対立が矛盾として認知され、それを解決するために超現実的な前提が生み出されるという循環構造が生まれるのだ。「オカルトを信じる」という信仰が、「オカルトをメディアにおいて発表し、それを様々な手法によって支える(オカルト関係のメディアを購入したりすることなど)」という儀礼発生させ、そしてその儀礼が更に信仰への動機付けになる、このような儀礼と信仰の相互作用が、オカルト信仰の構造には見出される。

もちろんこれはあくまで理論枠組みであり、実際はこのようにループが完璧にうまく行くことはなく、途中でループが解除されることなども起こりうる。逆に言えば、もしある一つのオカルト信仰が衰退するとすれば、そこにはこのようなループが存在し得ない理由見出せるはずだ。

この論文では上記のような視点に立ちながら、「人はなぜオカルトを信じるのか」ということを、「その裏にどのような矛盾があり、それがどのように受け入れ可能なものとされたのか」という原因論的アプローチと、「矛盾がどのように再生産されたか」という構造論的アプローチの、二つの軸から考察していく。

三. この研究の論点

1. 先行研究の整理

「人はなぜオカルトを信じるのか」ということを、「その裏にどのような矛盾があり、それがどのように受け入れ可能なものとされたのか」という原因論的アプローチと、「矛盾がどのように再生産されたか」という構造論的アプローチ、この二つの理論的視点から、先行研究を改めて整理してみよう。

民俗学におけるオカルト研究においては「個性」や「特別な自分」、「退屈でない非日常」というものへの憧れがオカルト信仰への背景にはあると主張する。これは、裏を返せば「自分は他の人とは違う特別な個性ある存在としてみとめられるべき」という自己イメージと、しかし実際に社会で与えられる評価(「特別ではないありきたりな人間」と)との間の矛盾や、「社会はもっと面白くあるべき」という自分の中の社会イメージと、しかしその自分が思うほどには面白くない実際の社会の矛盾であ

ると考えることが出来る。そして、そこでオカルトは自己イメージの認知が誤っているという現実的説明をするのではなく、「今の自分は前世では戦士であった」というような超現実的前提をおくことにより、矛盾を受け入れ可能なものにするがというメカニズムが想定されるだろう。

また、70年代オカルトにおいて、オカルトは環境破壊や核戦争の恐怖に対する警鐘として生まれたという議論も、「環境破壊とか核戦争はあってはならない」にも関わらず現実にはそのような恐怖が社会に蔓延していたことの、「理想」と「現実」の矛盾であると考えることが出来る。そのような屈託は80年代オカルトにはなくなったように思われるが、しかしそこで描かれる「終末後の日常」がそのままの「日常」ではないことから明らかなように、「虚構」と「現実」もまた矛盾していた。

スピリチュアリズム研究においても、「社会」や「世界」から引き離されたという剥奪感が人々をニューエイジ信仰などに向かわせたという研究結果があるが、剥奪感がなぜ生じるかといえ、それはそもそも「私は社会や世界と共にあるべきはずだ」という自己イメージの期待があり、しかしその満たされるべき期待が実際は満たされないという矛盾が存在するからこそ、剥奪感が生まれるのである(最初から剥奪を必然と考えていれば、そもそも「剥奪感」は生まれない)。

カルト宗教研究においても、ここでは大学生に社会が求めるイメージ(恋愛や友人関係が豊富である)と、自分自身の能力(人付き合いが苦手だからそういうものを作れない)とが矛盾を起こすことが、カルト宗教にのめりこむ第一歩だとされる。そしてそこで「恋愛は罪悪だ」というような社会一般の考え方とは違う超現実的な前提を信じ、それを表明することにより、更に周囲から孤立し矛盾を起こすという、まさに矛盾を再生産する構造の典型例が、カルト宗教には見出せるといえる。

2. この研究で明らかにすること

しかし一方で、このように先行研究に対し今回の論文で用いるような「矛盾を受け入れ可能にし、それを再生産する構造」というモデルは、適用自体はすることが出来るが、しかしそれをより精緻に描くことは難しい。なぜなら多くの先行するオカルト研究は、オカルト信仰の一場面、それも「信仰」の場面のみを取り出し、それを調査するというスタイルなため、通時的にオカルトを信じる人々がどのような過程を辿っていったか、そしてそれが本当に「矛盾の再生産」という循環構造を取っているかについて検証が難しく、また「オカルトを信仰することが社会に提示されたとき、それに社会がそれに対してどういう反応をするか」という、「信仰」と「儀礼」の相互作用の内、「儀礼」側の過程が見えてこないからだ。

よって、この研究では通時的にオカルト信仰の様態を分析し、特に「メディアで自らのオカルト信仰を表明する」という儀礼の部分を含めた分析を行うことが出来る、雑誌『ムー』のドキュメント分析を行う。そしてその中で、雑誌『ムー』の中でも様々なタイプの「オカルト信仰」があることを明らかにし、「人はなぜオカルトを信じるのか」という問いに対し、「矛盾を受け入れ可能にし、それを再生産する構造」というモデルに則りながら、答えを提示する。

第2章 この研究はどのような研究か

一. 研究方法について

この研究では、先に述べたような研究課題を明らかにするため、オカルト雑誌『ムー』のドキュメント分析を用いる。

オカルトに関する儀礼を考える時に、重要な儀礼として挙げられるのが、「オカルトに関する情報

を手に入れること」、そして、「オカルトに関する情報を発信すること」である。もちろんこれ以外にも、オカルト商品を購入したり、実際に神秘体験を行ってみたりということもあるが、特にオカルトに接し始めの人々、つまりこの研究で特に注目する、信仰と儀礼の循環によりオカルト信仰が固まる過程にある人々にとっては、この二つが大きなウェイトを占めることが予想される。

なぜ分析の対象がオカルト雑誌『ムー』なのか。理由は三つある。まず、オカルト現象を読み解くとき、それがどのような文脈によって理解されていたのかを読み込む必要があるということ。二つ目の理由は、投書欄の存在により「オカルト信仰をメディアで提示する」際の儀礼が観察できること、そして最後に、30年ほどの歴史がある雑誌なため、通時的にオカルト信仰を観察することが可能であるという点である。

二. 分析対象について

ムーという雑誌は、1979年11月から隔月刊で発行され、81年1月からは月刊となった雑誌で、自らの雑誌を「世界の謎と不思議に挑戦する SUPER MYSTERY MAGAZINE」という風に説明しているが、一般にはオカルト関係の情報を載せた雑誌とされている。

このようなオカルト雑誌は、80年代にブームになり、他にも『トワイライトゾーン』、『たま』と呼ばれるようなものがあつたが、いずれも80年代末に廃刊し、現在残っているのは『ムー』だけである。それもあって、雑誌『ムー』はオカルトの代名詞のような存在として認識されている。

三. データ収集の手順と集めたデータについて

雑誌『ムー』のバックナンバーについては、古書店から1982～83年、87～88年、92～93年、97～98年、そして2000～04年、07～08年のおよそ五年ごと(2000年代については03年の雑誌がなかったため00年と04年の雑誌も含めた)に、12～3月、4～7月、8～11月の間でそれぞれ一冊を取り寄せ、一年で合計三冊、全体で18冊取り寄せた。

具体的に何年何月の雑誌を対象にドキュメント分析を行ったかは下記の表に記した。

	12～3月	4～7月	8～11月
1982年～83年	1982年12月号	1983年7月号	1983年9月号
87～88年	1988年2月号	1988年6月号	1988年8月号
92～93年	1993年1月号	1993年4月号	1993年10月号
97～98年	1998年3月号	1998年5月号	1998年11月号
2000～04年	2004年1月号	2000年6月号	2000年11月号
07～08年	2008年2月号	2008年7月号	2008年12月号

第3章 雑誌のドキュメント分析

一. 雑誌構成

『ムー』の雑誌は、基本的に以下の部分から成り立っている。

1. 巻頭のカラーグラビア:この部分は外国の遺跡や祭り、惑星などの宇宙の写真やUFOなど、カラーの写真が映える記事が多い。
2. 特集記事:その巻毎の様々な特集記事。特集の記事の内容はUFO、超能力、心霊、古代科学など多岐にわたる。

3. 不思議体験談: 読者が遭遇した不思議な体験を投稿して貰い、それを載せている。怪談などが紹介されるのも主にこの記事である。
4. 世界の不思議情報: 様々なメディアに載っていた情報を500~700文字程度で紹介する。紹介する情報は一応「UFO、怪獣、超能力・心霊、古代文明、サイエンス、神秘、奇跡」という風に区分されているが、その区分は必ずしも明確ではない。
5. 書評・映画評: 出版されている本や上映される映画についての情報。90年代前半まではオカルト的なものが選ばれていたが、今は特にそういう括りはなく、テレビゲームの紹介などもある。
6. 読者投書欄: 読者からきた投書を載せている。
7. 編集後記: 編集部の様子などを載せている。

後述するように、それぞれの記事の内容や、どのような話題がとりあげられるかは82年から変わっているのだが、しかしこのような雑誌の構成自体は、あまり変わっていない。

二. 記事の分析

1. 文章構造について

雑誌『ムー』においては、記事の文章に一定の特質が認められる。

『ムー』の記事においては、『ムー』独自の調査によってのみ書かれる記事は、読者からの投稿(先程の雑誌構成でいう「不思議体験談」)や、それに基づく取材を除いてあまりない。基本的に、本や海外のテレビ番組などのメディア情報や、「〇〇氏の発言」というような伝聞情報から構成され、その記事の書き手は、それらの情報から、その情報の裏にどのような「真実」があるかを推測していく。

ただ一方で、そうであるが故に、実は『ムー』の記事はとても「科学的っぽい」印象を読者に与える。というのも、記事の著者が主観的に感じたことではなく、あくまで二次情報をソースにしているため、読み手の側もそれに対して「それは違うんじゃないか」とか、「別の考え方もあるのではないか」ということを考えることができるのだ。事実、読者投書欄にはそのような「〇〇の記事について私が考えたこと」というような手紙が多く寄せられる。

2. ジャンルの推移

ムーの記事においてどのようなジャンルがどれぐらいのページ数で取り上げられたか、そして、どの年にどんなジャンルが盛り上がっていたかを示したのが以下の表である

ページ数	83年	88年	93年	98年	00~04年	08年	総数
投書欄	45	43	43	36	27	15	209
体験談	17	24	27	18	17	15	118
UFO・宇宙人	92	58	17	22	14	58	261
超能力・魔術・タロット	70	94	57	20	73	36	350
UMA	8	22	8	10	4	18	70
超科学	77	21	38	44	39	50	269
古代文明・科学	33	102	39	56	85	48	363
心霊	83	18	36	9	49	4	199
伝説・神話・宗教	104	101	106	73	79	31	494

人はなぜオカルトを信じるのか

怪談	33	22	46	6	8	23	138
陰謀論	66	4	80	36	18	77	281
終末論・予言	46	39	93	69	54	56	357
健康・生活・気功	16	27	18	25	41	23	150
自己啓発・心理学・脳科学・夢	45	8	37	63	36	0	189
「科学」・自然	12	9	1	13	31	14	80
フィクション	19	0	0	15	4	0	38
ページ総数	578	664	686	586	604	581	3699

※主要5ジャンルを太字にし、その時急上昇していた者を赤字斜体にした。

ページ総数の順位	83年	88年	93年	98年	00～04年	08年	合計
第一位	伝説・神話・宗教 (104)	古代文明・科学 (102)	伝説・神話・宗教 (106)	自己啓発・心理学・脳科学・夢 (83)	古代文明・科学 (85)	陰謀論 (77)	伝説・神話・宗教 (494)
第二位	UFO・宇宙人 (92)	伝説・神話・宗教 (101)	終末論・予言 (93)	伝説・神話・宗教 (73)	伝説・神話・宗教 (79)	UFO・宇宙人 (58)	古代文明・科学 (363)
第三位	心霊 (83)	超能力・魔術・タロット (94)	陰謀論 (80)	終末論・予言 (69)	超能力・魔術・タロット (73)	終末論・予言 (56)	終末論・予言 (357)

※二つのジャンルにまたがるような記事の場合は重複してカウントした

※ページ総数にはどのジャンルにも属さない広告ページも含んでいる

継続的な変化は見あたらないが、盛り上がったジャンルにはそれぞれその年の特色が読み取れることが分かる。

● 80年代

「伝説・神話・宗教」や「UFO」、「古代文明・科学」などの、それ以降も注目を集めるようなジャンルが多く取り上げられている。83年には「心霊」が三位に登場するがそれ以降はあまり登場しなくなっている。

● 93年

二位、三位に「終末論・予言」や「陰謀論」といった、それまでは目立たなかった話題がこの頃から多く取り上げられるようになった

● 98年

93年ごろから増加した「終末論」が依然多く取り上げられる中、三位に「自己啓発・心理学・脳科学・夢」が出てくる。このジャンルはこの頃のものみの増加となった。

● 00～04年

「陰謀論」や「終末論・予言」が減少していく中、80年代にある程度多く取り上げられながら90

年代に衰退した「超能力・魔術・タロット」がこの頃復活する。

● 08年

再び「陰謀論」や「終末論・予言」が大きく取り上げられる一方、80年代に多く取り上げられながら90年代にはあまり取り上げられなくなった「UFO・宇宙人」が再び多く登場するようになる。

三. 読者投書欄の分析

1. ペンパル募集欄

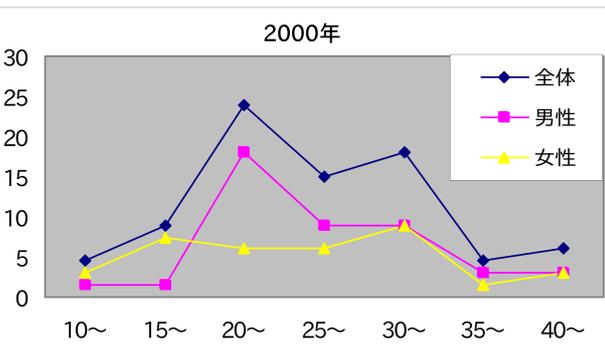
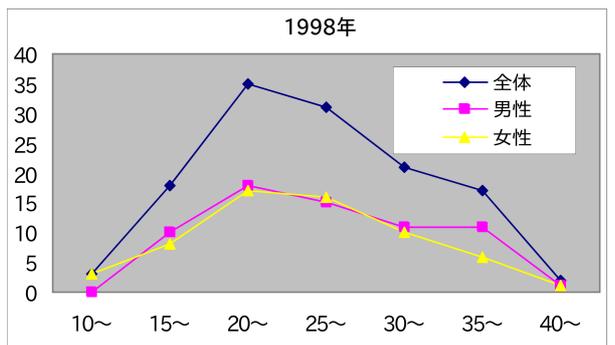
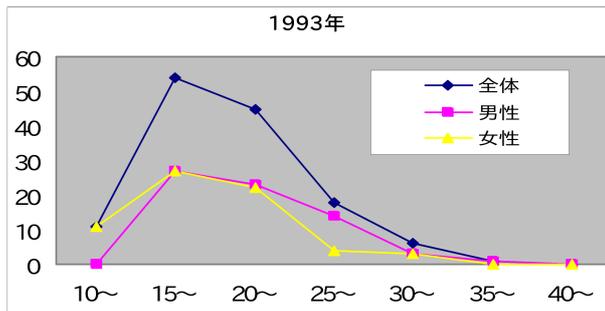
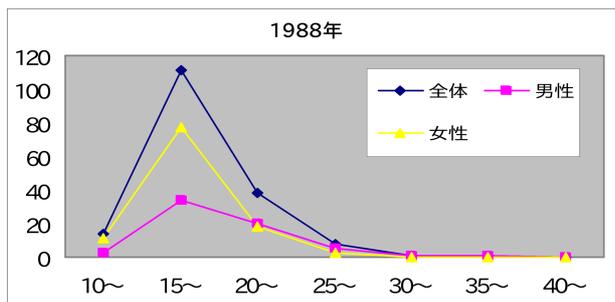
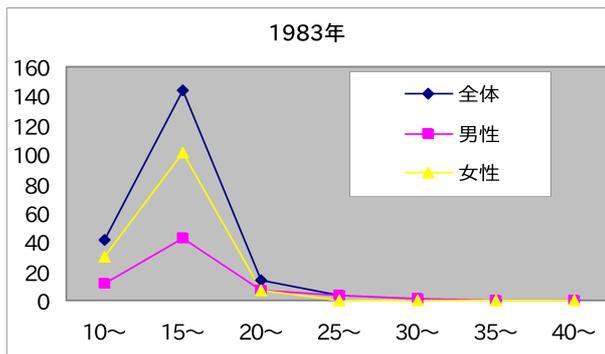
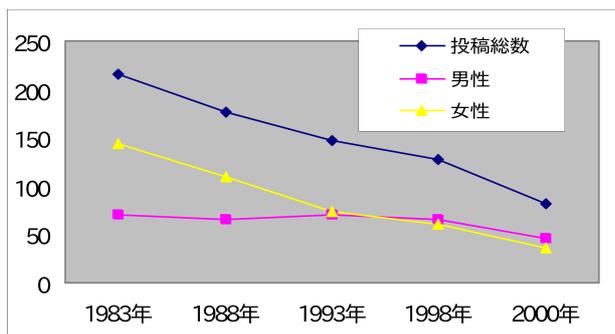
ムーの投書欄には2000年までペンパル(文通相手)募集欄というものがあり、そこに応募すれば、性別・年齢・住所を公開した上で、文通相手を募集することが出来た。その年齢・性別を集計したのが次の表とグラフである(地域については明確な差が見いだせなかったため載せなかった。これはつまりムーの読者層が地域の偏り無く全国に遍在していたということでもある)。表は二つあり、それぞれ出版年と年齢・性別をクロスさせた集計表と、出版年と世代(コーホート)・性別をクロスさせた集計表である。グラフは、最初の表の直後にあるのが、投書数の出版年ごとの推移であり、その次に出版年ごとにどのような年齢層が多く載せられていたかを表したグラフを載せた。そして第二の表の後には、それぞれの世代がどの出版年にどの程度載せられていたかを表したグラフを載せた。

もちろん、「文通相手を募集する」人に限定された読者像という点で、これらはムー読者の読者像をそのまま代表するものではないが、しかし「少なくともこのような年齢・世代・性別の人はムーを読んでいた」ことを示すデータではある。

	1983年	1988年	1993年	1998年	2000年	総計
投書総数	215	177	147	127	81	720
男性	71	65	70	66	45	302
女性	143	110	73	61	36	411
10～	42	14	11	3	4.5	73
15～	144	111	54	18	9	333
20～	14	38	45	35	24	148
25～	4	8	18	31	15	71
30～	1	1	6	21	18	41
35～	0	1	1	17	4.5	22
40～	0	0	0	2	6	6
10～(男性)	12	3	0	0	1.5	16
15～(男性)	43	34	27	10	1.5	115
20～(男性)	7	20	23	18	18	80
25～(男性)	4	5	14	15	9	44
30～(男性)	1	1	3	11	9	22
35～(男性)	0	1	1	11	3	15
40～(男性)	0	0	0	1	3	3
10～(女性)	30	11	11	3	3	57
15～(女性)	101	77	27	8	7.5	218
20～(女性)	7	18	22	17	6	68
25～(女性)	0	3	4	16	6	27
30～(女性)	0	0	3	10	9	19
35～(女性)	0	0	0	6	1.5	7
40～(女性)	0	0	0	1	3	3

※2000年は2号しかないため実数に対し1.5倍し、他の3号あるものと整合性を取った

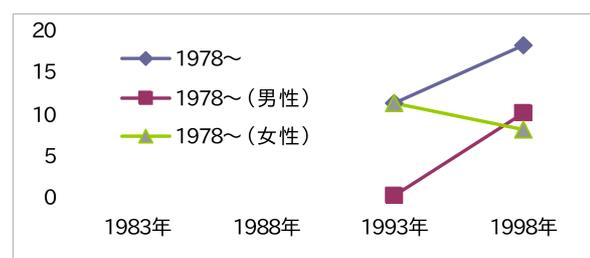
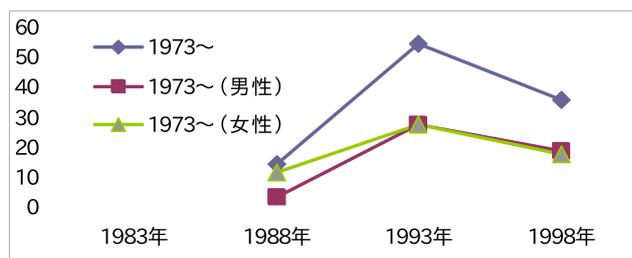
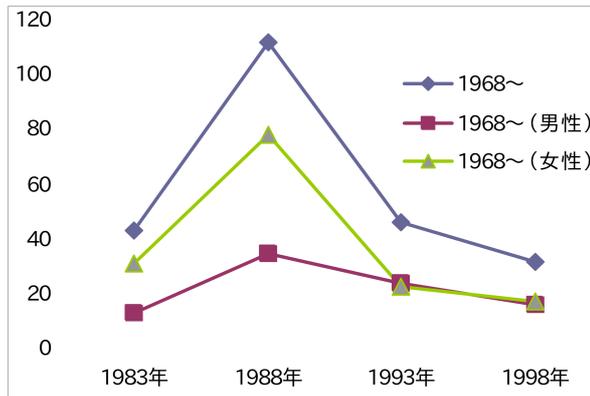
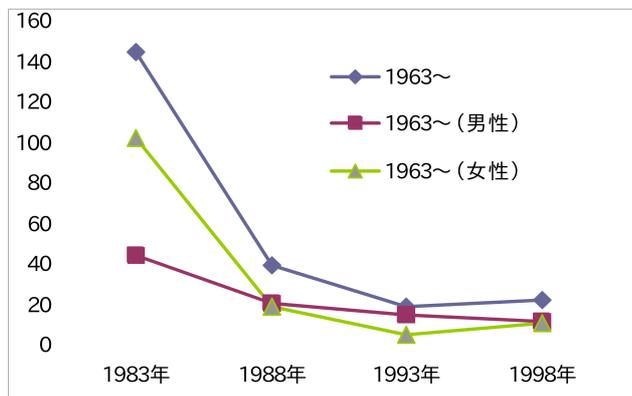
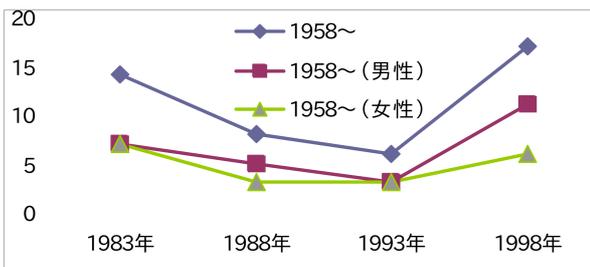
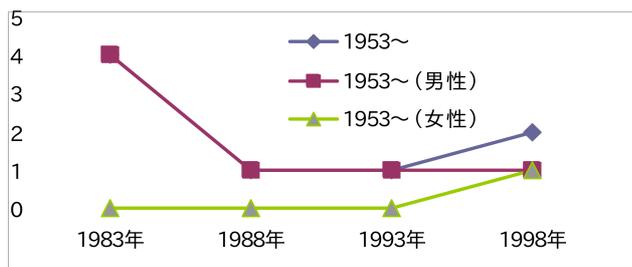
人はなぜオカルトを信じるのか



	1983年	1988年	1993年	1998年	2000年
投書総数	215	177	147	127	81
男性	71	65	70	66	45
女性	143	110	73	61	36
1953~	4	1	1	2	
1958~	14	8	6	17	6
1963~	144	38	18	21	4.5
1968~	42	111	45	31	18
1973~		14	54	35	15
1978~			11	18	24
1983~				3	9
1988~					4.5
1953~(男性)	4	1	1	1	
1958~(男性)	7	5	3	11	3
1963~(男性)	43	20	14	11	3
1968~(男性)	12	34	23	15	9
1973~(男性)		3	27	18	9
1978~(男性)			0	10	18
1983~(男性)				0	1.5

人はなぜオカルトを信じるのか

1988～(男性)					1.5
1953～(女性)	0	0	0	1	
1958～(女性)	7	3	3	6	3
1963～(女性)	101	18	4	10	1.5
1968～(女性)	30	77	22	16	9
1973～(女性)		11	27	17	6
1978～(女性)			11	8	6
1983～(女性)				3	7.5
1988～(女性)					3



● 80年代

大部分を十代、つまり1963～72年生まれ世代が占め、その中でも女性が男性の二倍ほど存在していた。25歳以上はごく僅かであり、25歳以上は、『ムー』を読んでいないか、読んでいたとしても文通募集などを行っていないことが分かる。

内容としては、まず自分の興味を述べ、それについて語れる人を募集という内容が多く、興味の内容はオカルト的なことから、アニメ・漫画などのサブカルチャーなど様々なものがある。また、「不思議な体験をした方、幽体離脱の出来る方、超能力のある方、おたよりくださいね」と、実際に超常体験をしたりした人を求めたり、「自分がESPER(超能力者)だと信じているわたしです」と、自分が

超常体験を出来ると示したりする応募や、「アストラルツインを捜しています。S40・9・6 生まれの方、ぜひ連絡を。できれば文通しませんか。」というように、先行研究で紹介したような「前世の仲間捜し」的な応募もある程度見られる。

また、応募の対象としては、「同年代」もしくは「年上」を求めるケースが多い。性別は同性を求めるケースもあれば異性を求めるケースもあり様々である。

● 93年

全世代・年齢にわたって男女の数の差が無くなり、年齢も10代だけじゃなくある程度の広がりを出すようになる一方で、募集数は減少している。1963～72年世代は、80年代に大量にペンパルを募集していた女性が多く激減し、これが募集数減の大きな理由となっている。しかしそれでも残っている人は多く、その層においては男女の偏りはみられない。また、1973～77年生まれ世代が徐々に応募してくるが、この世代の数は80年代の1963～72年生まれ世代と比べ数は少ないものの、最初から男女の偏りはない。

● 90年代後半

応募数全体が減少に転じていく中で、当時既に35～40代である1958～62年生まれ世代が増加に転じる。この層においてはむしろ男性層の方が多く増加している。また、1978年～生まれ世代も、女性が減少する一方、男性が増加している。

また、この時期内容にも一定の変化が見られる。具体的に言うと98年以降、「宗教関係の人はお断り!」や「宗教勧誘、サークル勧誘、セールスはお断り。」という様に宗教やその他現実で活動をする集団などを拒否する意志を示す募集が多くなったり、「※ただし、根暗でネガティブな方、オタクな人、宗教関係はお断りします」という様に応募する対象を限定したりするケースも見られるようになった(それまでは、「根暗な私です」という様に、自らが根暗であることを告白するケースはある程度あったが、根暗な人を明確に拒否するケースはほぼ見られなかった)。

● まとめ

ペンパル募集におけるそれぞれの世代・性別の出版年ごとの推移から、以下のようなグループ分けが可能ではないかという仮説を立てた

1. 1958～62年生まれ世代
90年代後半～2000年代にペンパルを募集
2. 1963～72年生まれ世代・女性
80年代に多くペンパルを募集するが、90年代には募集しなくなる
3. 1963～72年生まれ世代
80～90年代に継続してペンパルを募集
4. 1973～77年生まれ世代
90年代からペンパルを募集
5. 1978年～生まれ世代
90年代後半からペンパルを募集

このような類型分け仮説に則りながら、次にそれぞれの出版年の投書を分析していく。

2. 投書分析

● 83年

投書の内容は主に

1. 不思議体験系
2. 仮説論述系
3. 生き方提言系
4. 雑誌応援系

の4つに分けられる。「不思議体験系」というのは要するに「自分はUFOを見た!」とか「こんな前世の記憶があるんです」、「心霊体験をしました」という様な、超常現象の体験を投書するものであり、二つ目の「仮説論述系」とは、ムーの記事や、ムーに限らず様々な本などの情報を自分なりに研究し、そこから自分なりの、「ノストラダムスの預言はこういう意味だったんじゃないか」とか「日本神話に出てくる神々は実は宇宙人だったのではないか」という様な仮説を投書するものである。3つ目の「生き方提言系」とは、先の「仮説論述系」のように様々な情報を元にしながら、そこに自分の価値観をまじえ、「だから私たちはこう生きるべきではないか」という様に人の「生き方」を提言する投書である。そして4番目の「雑誌応援系」とは、ムーの雑誌を応援したり、「こんな企画をしてみたらどうでしょう」とムーの編集部提案したりする投書のことである。投書欄の投書は主にこの4つに区別できる。

量としては「不思議体験系」が多く、次に「仮説論述系」、「生き方提言系」がある程度あり、「雑誌応援系」が少しという程度である。「不思議体験系」の内容としては、「こよりで割り箸を割る」、「もうしません念力乱用」、「私を起こしたのはだれ?」といったような、いわゆる超能力や心霊体験が多い。

投書者の性別は、「不思議体験系」は女性の投書が多いがしかしその男女の数の差はペンバル募集における差ほど大きくはなく、「仮説論述系」、「生き方提言系」、「雑誌応援系」においてはほぼ男女の差は見取れない。

年齢は、不思議体験系に限っては10～19歳の「1963～72年生まれ世代」が多くを占めるが、その他の「仮説論述系」、「生き方提言系」、「雑誌応援系」においてはむしろそれより上の世代、1958年生まれ以前がかなり多い。

ただ、投書には年齢が書かれているものもあれば書かれていないものもあり、また性別についても名前や文章・文体で判別可能なものもあればそうでないものもあって正確に把握することはできないため、これは判別できるものに限っての分析であることに注意する必要がある。

● 88年～93年

88年になると今度は「生き方提言系」の投書が多く掲載されるようになり、そして次に「不思議体験系」、「仮説論述系」の投書がある程度掲載されるが、「雑誌応援系」の投書はほぼ掲載されなくなる。

投書者の年齢も大きく変化し、大部分を当時15～24歳の「1963～72年生まれ世代」が占めるようになり、それより上の世代の投書が少なくなる。93年になると「1973～77年生まれ世代」も投書してくるようになり、「1963～77年生まれ世代」、つまり15～30歳ぐらいの投書が投書欄のほとんどとなる。

また、サークル紹介のような投書も増える、紹介されるサークルのほとんどは「1963～72年生まれ世代」、つまり高校生などが主体となって作られたサークルであり、「明るさ」を前面に出した形で

紹介された。

男女比については特に変わらないが、サークル紹介において紹介されるサークルには女性が多かった。

また、投書欄でテーマが設定され、そのテーマについて読者が投書するという企画も時々行われ、1988年8月号においては「人間はだれでも超能力を持っているか」というテーマで投書が募集されたり、1993年10月号には「破滅を前にした人類が子供を生むのは罪悪か」というテーマで投書が募集されたりした。投書の内容としては、「人間はだれでも超能力を持っているか」というテーマについては「持っている。ただしそれを開花させるためには人間性の鍛錬が必要」というような答えが多かった。「破滅を前にした人類が子供を生むのは罪悪か」というテーマについては様々な意見が寄せられたが、編集部によれば「女性からの意見が7割近くで、しかも主婦の方のものがとても目立」つたらしい。

● 98年～2000年

しかし98年になると投書欄自体のページ数も43ページか36ページへと7ページ減少し、内容も大きく変わる。93年までにあったような特集はなくなり、内容も「生き方提言系」の投書は殆ど見られなくなり、「不思議体験系」と「仮説論述系」の投書が殆どを占めるようになる。「不思議体験系」の内容としては、「UFOを見た」や、「地震雲を見つけた」などの、80年代の不思議体験と違って外的な体験が多い。

そして投書する年齢層も10代、つまり「1978年～生まれ世代」は殆ど見られず、20～35歳の「1963～77年生まれ世代」が殆どを占めるようになる。「不思議体験系」の投書もこの世代が行っている。

そんななかで2000年11月においては久しぶりに「17歳は危険か!？」というテーマで投書が募集される。これは2000年9月号に載った「17歳の凶悪犯罪の深層」という記事を契機に行われたもので、内容としては、「オタクな人が危ない」、「ゲームが少年犯罪の原因である」という内容の記事に対して、読者が「ゲームではなく自由主義の蔓延が原因だ」、「親の教育が悪い」というような反論を投書するというものになっている。

しかしこのような特集においても、応募しているのは殆ど20代～30代の世代で、当事者の10代の投書はゼロだった。

ただ投書の応募がない一方で、イラスト募集には10代の投書も見られる。これは2004年以降も変わらない。

● 2004年以降

この頃から投書に年齢を明記する率が減少し、年齢の明記がない投書の方が多くなる。

また投書のページ数そのものも27から15へと減少していく一方で、一つ一つの投書の文字数は多くなる傾向にあり、結果として載せられる投書の数は減少している。

そんな中で年齢を明記しているものの年齢層を見ると、相変わらず「1978年～生まれ世代」は見られず、27～42歳の「1963～77年生まれ世代」が多くを占める。中には「毎月、親子で楽しみに『ムー』を読んでいます。」という内容の投書もあり、そしてこれも親世代の投書だった。

そんな中でそれまでは見られなかった「1958～62年生まれ世代」の投書も一部見られるようになる。この世代の投書は1983年には見られたものだったがそれ以降見られないものだった。内容

としてはかつて日本にキリストがやってきたという主張をしながら、「やはり日本は『主』の国なのでしょう。」と主張するようなナショナリズム的な内容や、「宝くじ」に当たるような「開運本」を求める内容などが見られる。

第4章 考察

それでは、以上の様な分析からどのようなことが言えるか。まず、ペンパル募集欄の分析から、ムーの読者像を「1963～72年生まれ世代・女性」、「1963～72年生まれ世代」、「1973～77年生まれ世代」、「1978年～生まれ世代」、「1958～62年生まれ世代」の五類型に分け、それぞれについて、どのような矛盾がオカルト信仰の動機となったのか、そして、その矛盾がどのように再生産されたか(またはされなかったか)を検証していく(一.どのような人が『ムー』を読んできたか)。そして、それぞれのオカルト信仰にどのような相違点と共通点が見いだせるか分析していき(二.それぞれの「オカルト信仰」の相違点と共通点)、最後に、そこから何が言えるか、つまり、この論文では「オカルト信仰」にどのような理由を見だし、そしてその理由をそれまでの先行研究における考察と比較して、どのような点が新しい視点として提示できるかまとめを提示する(三.ここから何が言えるか)。

一. どのような人が『ムー』を読んできたか

1. 1963～72年生まれ世代・女性

この集団の最も大きな特徴は、その数の多さと、そしてそうでありながらその出現時期は80年代、つまり彼らが10代だったころに集中し、それ以降は激減しているという点である。もちろん、この激減はあくまでペンパル募集欄での減少であり、ペンパル募集しなくなったといってももしかしたら雑誌自体は継続して読んでいるかもしれない。しかし少なくとも90年代以降はペンパル募集や投書欄においても性差がなくなっていることから、1963～72年生まれ世代の女性には、10代には積極的に活動していたが20代になると積極的に活動しなくなった層が居ることは推測できる。

そして、この層の最も大きな特徴としては、彼女らが好むオカルト文化が超能力や前世記憶、神話、守護霊などの分野に集中していたことである。彼女らは80年代の投書欄において「不思議体験系」の投書は多くしたが、「仮説提言系」の投書は殆どしなかった。これは投書欄に投書された、10代女性が多くを占める「オカルトサークル」の紹介からも推察される。そのようなオカルトサークルの紹介においては、様々なオカルト的なことについて「楽しく語り合っている」ことが強調され、「真相を追求する」というようなまじめな研究という側面は、少なくとも強調はされなかった。

ただ一方で、確かにそれらは趣味的に「楽しく語られる」ものであったが、しかし一方でそれらは超能力や前世・神話などと言ったオカルト的なものであり、単なる趣味と片付けられるものでもないだろう。では、なぜ彼女たちは超能力や前世・神話に傾倒していたのか。

● 80年代における若年層女性特有の困難さ

その要因の一つとして考えられるのが、この時期の女性特有の困難さである。80年代とは、その時期に成人する女性のライフコースが著しく変化していった時期であった。およそ1955年から75年の間に存在した「家族の戦後体制」(女性が専業主婦となり、男性が働く核家族、落合[1994-2004])が崩壊していく中で、それでも従来通り結婚して専業主婦となるのか、それでも大学や短大なりに進学して、そして就職をするのかという選択を迫られるようになった。しかしその選択は当

人たちが自由に選択できるものではなく、進学なり就職をする女性に対しては「女は結婚して家に入るのが一番だ」という社会的な圧力がかかり、更には、合格率が85年から92年にかけてどんどん低下していくこと(文部科学省[2009])からも分かる熾烈な受験戦争に勝ち残らなければならない。しかしその一方で、結婚という選択肢を取ろうとしても、結婚するイコール専業主婦となるという風に見られていた当時には、結婚すればもはや自分の自己実現は不可能であると考えられていたし、更に言えば女性しか跡継ぎが居ない家では、「次男・三男」を婿養子に入れて家を存続させることを求められたが、しかしそのような男性は少なかった。

このような状況の中で、女性の自己像もきわめてアンビバレンツな状況となっていた。進学し、正社員として就職するといった様な自己実現を図ろうとすれば女性に「母」役割を期待する旧来の女性像とそぐわなくなる。しかし一方で80年代に社会構造が変化していく中で生まれてきた、新しい「自己実現する私」という女性像もどんどん強くなっていき、そしてどちらの女性像を選択するとしても、それはもう片方の「女性像」とは違うものになってしまうという、構造的に矛盾が生まれてしまう状況に当時の10代女性はあったと言える。

- 「ありのままの私」を肯定するものとしてのオカルト

そのような中で、そのような矛盾しあう二つの「女性像」の要求、その矛盾を受け入れ可能にするために発生したのが、先行研究でも指摘されているような、超現実的な場所で提示される「『ありのままの私』像」だったのではないだろうか。

超能力や前世・靈感という不思議体験が、当時の10代女性から語られるとき、その語りにおいては殆どの場合「～という力があることに、ある日突然気づいた」というような、「突然の気づき」が語られる。つまり、ずっと何ヶ月から何年もの間練習や鍛錬を積み重ねることによってそのような能力を獲得するのではなく、ある日突然自分が超能力を持っていることに「気づき」、あるいは自分が前世において戦死だったことに「目覚める」。そして、今はそれに目覚めていない者にとっても、そのような力や記憶は、元々備わっているものであると認識されるのである。このことは、1988年の投書欄において、「人間はだれでも超能力を持っているか」というテーマが提示されたとき、すべての者がそれに対して肯定的な答えを出したことから分かる。つまり、超能力や前世・灵感信仰は、「ありのままの私」がありのままに居るからこそ、持てるものであると、当人たちには認識されているのだ。

そしてそのような信仰を信じるとき、そこでは「母役割を背負う私」や「自己実現する私」という二つの女性像の対立は、どちらを選ぶ、または選ばなかったとしても、それが「ありのままの私」の選択であるから矛盾ではないということになる。

これは、大塚[1996]の指摘する「かわいい」という概念と機能的には等価であるといえよう。大塚は70年代初頭に登場してきたサンリオやピンクハウスといった少女文化について、それらがそれまで「母親」として男性社会からしか自己像を描けなかった少女たちに対し、自らの手で自らの自己像を描く「私語り」の表現を与えたと考察している。そして大塚は1970年代に描かれた「く乙女ちっく」少女漫画についての橋本治の論考を引用しながら、その私語りの構造が「女性自体が描いた物語の中で、主人公が王子様によって内面を全肯定される」ものであるとも述べている。そして、この「63～72年生まれ世代・女性」のオカルト信仰においては、王子様としてまさに超能力や前世・灵感が信仰されたのではないかと、考察できるだろう。

- なぜ彼女たちのオカルト信仰は一過性のものに終わったか

では、その様な要因がこの集団のオカルト信仰にあったとして、ではそれはなぜ一過性のものとなったのか。

まず指摘できることとしては、この集団のオカルト信仰におけるメカニズムにおいては、この節以降で述べられるような「矛盾の再生産」が起こりえなかったということがある。例えば、ある人が夢で前世の記憶を思い出した、あるいは幽霊が見える様になったとして、それを「検証」することは可能か？答えは否である。前世や靈感といったものは、あくまで本人が本人の心の中で感じるものであり、それはそもそも外部から検証できるような性質のものでもない。超能力にしても、超能力によって何かをなした結果自体については、外部からの検証はもちろん可能だが、しかし幾らその結果を検証したとしても、その人が実際に特別な力を持っているかどうかは、検証できない。

以上の様な理由から、そもそも超能力や前世・靈感というものに対しては、他の UFO や陰謀論、疑似科学ほどには「アンチ」も付きにくい。それらのことを元に何か社会的な主張、例えば「霊が言うには人間はこのように生きるべきだそうだ」などという様に主張すればそれは議論の対象となり、社会とのコンフリクトが生まれるが、「私には霊が見える」という風に言っている段階ではそれは個人の私的なことであり、社会とのコンフリクトはあまり生じない。

そして更にこの集団のオカルト信仰が一過性に終わった要因には、このオカルト信仰が生まれた背景である「自己像の矛盾」が、成人すれば大体の場合解決するものであるということも挙げられるだろう。確かに 10 代の内はまだ何も決まっていないが故に、「自己像はどうであるべきか」という問題に悩む。しかし一旦その悩みを過ぎ、就職なり、あるいは結婚して専業主婦や共働き主婦になったりすれば、基本的にその決めた道を進めば良いだけで、迷いはあまり生まれない。また女性の就労に対する意識も、80 年代は女性の正社員としての就労は特別なこととみなされていたが、90 年代には普通のこととなった。このようにとりあえず成人してしまえば自己像は一旦安定される以上、不安定な状況でそれでも「私」を描くために必要とされたオカルト信仰は必要なくなる。

もちろんだからといってその後のこの集団がオカルトと何の関係もないところに居ると断言は出来ないだろう。例えば櫻村[1998]によれば、ニューエイジや精神世界などへの信仰は 1998 年における 20 代後半～30 代の女性、つまりまさに「1963～72 年生まれ世代・女性」においてみられるという。そしてそれらの人々は、過去の人生において精神世界やオカルト的に触れたことがあり、それが仕事や結婚生活といった生活での危機に直面したときに思い起こされたのがニューエイジや精神世界などへの信仰のきっかけになっているという。

しかし一方で、そうなったときに彼らが信仰するのは、ニューエイジや精神世界に関するものであり、『ムー』で多く取り上げられるようなオカルトではない。そして現在の『ムー』の側も、ジャンル分析を見れば分かる通りそのような精神世界に偏った雑誌形態を取ることはなく、割とニューエイジやスピリチュアリズムとは距離を取っていると言えよう。詳しくは後節で述べていくが、現在の『ムー』はそのようなスピリチュアリズムとは違うオカルトによってオカルト信仰を維持する構造を持っている。

2. 1963～72 年生まれ世代

さて、上記のような理由から、「1963～72 年生まれ世代・女性」はその多くが 10 代でオカルト信仰をやめているわけだが、しかしペンパル募集に占める「1963～72 年生まれ世代」の割合は、他の世代が 80 年代における「1963～72 年生まれ世代・女性」の数ほど流入してこなかったこと

もあり、大きい。また、「1963～72年生まれ世代」のペンパル募集は、女性に限ってみると大きく減少しているが、男性に限ってみると女性ほど大きく減少はせず、その結果として1993年になると、それまではペンパル募集は女性が多かったのに対し、男女の性差がなくなり、男女ほぼ同数となる。

つまり、先に挙げたように「1963～72年生まれ世代」には、10代でオカルト信仰をやめた「1963～72年生まれ世代・女性」という集団以外に、男女の差なくオカルトを信仰し続ける別の集団がいることが推測される。そしてこの集団は、多少の減少はあるものの『ムー』を一貫して読んで投書し続け、『ムー』という雑誌の30年間を支えてきたのだ。では、この集団は一体どのような集団なのか。

まず、この集団は前項の集団から見て相対的に、「生き方提言系」の投書を88年、93年に多くしたと言える。このことは88年、そして前項の集団がオカルトから離れた93年の投書に多かった「生き方提言系」の投書が殆どこの世代からなされており、そしてそれらの投書に男女比の偏りがみられないことから、推測される。

しかし投書欄分析でも述べたとおり、98年になるとそのような「生き方提言系」の投書は数を減らしていく。しかし「不思議体験系」、「仮説提言系」においてもこの世代は多く投書しているため、結果としてこの世代の投書は減らなかった。

● 「生き方提言系」投書の背景にある生き方不安

この世代集団のオカルト信仰の背景にはどのような要因が考えられるか。それを考えるためには、まず「生き方提言系」という投書が一体どのような背景からなされるものなのか考察する必要があるだろう。

「生き方提言系」の投書とは要するに、「人はどのように生きるべきか」ということを、様々なオカルトから考えようとするものである。例えばこのままでは1999年に世界は重大な危機を迎えるから、その時に備えて十分な準備をしておかなければならないとか、私たちは守護霊に守られて生きているのだから、そのような守護霊に対する信仰を大事にしなければならぬという内容の投書がある。

このような「私たちはどう生きるべきか」ということがなぜ投書するほどの「問題」となりうるかといえば、それは逆に言えば、「私たちはどう生きるべきか」が分からないからこそであると言える。つまり、「私たちがどう生きるべきか」分からないから、その答えをオカルトに求めようとするのである。

これは前項の「不思議体験系」の投書に見られたオカルト信仰とは大きく異なる。前項の集団のオカルト信仰においては、「母親となる」、「自己実現をする」という二つの「生き方」が、それぞれ矛盾しながらも大きな妥当性を持っているからこそ、その二つを共に受け入れ可能にするということが問題となり得たわけで、逆に言えばその問題は、それぞれの「生き方」が分かりすぎているからこそ生じる問題だった。それに対して「生き方提言系」においては、そもそもそのような既存の「母親となる」、「自己実現をする」といった生き方が妥当性を持っていると感ぜられない、なぜそういう風に生きなければいけないか分からないということが、問題となるのである。

つまり、ここでオカルト信仰が受け入れ可能にするべき矛盾と定めるのは、「自分がどのようにこれから生きるべきか分からない」にも関わらず、「これから先どのように生きるべきか自分で選択しなければならない」という矛盾である。このような問題は「〈大きな物語〉の衰退」として、先行研究でも指摘されている(大澤[1996]、櫻村[2003]、宮台[1998]など)し、それが現代的な現象であるかどうかをさておけば、人生経験が未だ少ない若者が「どう生きるべきか」悩むというのは、近

代の青年にとっては通過儀礼とも言えるべき問題であるとも言える(高田[2005])。そしてこの矛盾を、「生き方提言系」のオカルト信仰は「世界の終末が迫っている」といった超現実的な前提によって受け入れ可能なものとする。

この構造が端的に表れているのが1993年10月号で特集された「破滅を前にした人類が子供を産むのは“罪悪”か!?”というテーマの投書である。通常、「子どもを生むべきか」というテーマはきわめて個人的なもの、つまり「個人が自分の価値観でもって解決すべき問題」とされるが、しかしそもそも自分の価値観ががっちり決まっていればこんなテーマの問題は生じないわけで、そういう意味でこの問いには受け入れがたい矛盾がある。しかしそこで「破滅を前にした人類」という超現実的な前提をおくことによって、それは価値観ではなく状況判断の問題とされ、人々にとって受け入れ、そして議論の対象となるわけである。この世代集団のオカルト信仰の要因として挙げられるのは、まさにそのような矛盾であるといえる。大澤[1996]はこのような「終末」という超現実的な前提の機能を、オウム真理教の終末論信仰にも見いだしている。

● オウム事件の影響とデータベース消費化

さて、しかしこのような「生き方提言系」の投書は、投書欄分析でも述べたように1998年になると殆ど見られなくなる。この要因は、第一にはオウム事件が与えたインパクトであると言えよう。先ほども述べたとおり、「生き方提言系」のオカルト信仰のメカニズムは、オウム真理教の終末論とほぼ同じである。終末や陰謀といった、社会では信じられていないが当人たちにとってはとても強く信じられていることに沿って、自らの生活を営むという点では、その当時の『ムー』の読者はオウム真理教とメカニズムの点でよく似ていた(1988年の雑誌『ムー』には毎号オウム真理教の広告が載っており、『ムー』とオウム真理教はその点でも近い関係にあった)。そしてそれ故に、オウム事件以降は「オカルト SF 雑誌『ムー』を読んでいることは、とても恥ずかしいことになった。」(宮台[1998]より)のである。

そのような危機にあってオカルト雑誌『ムー』は出来る限り「オウムの」なものを雑誌から排除しようとしたその結果、「生き方提言系」のような現実のことについて語るような投書は排除され、オカルト内部の内輪向け議論である「仮説提言系」が代わりに多く取り上げられるようになったのではないかという推測ができる。

また、そのような「オウム」の問題を抜きにしても、「生き方提言系」のメカニズムは、長い間継続していくと原理的に変質していく構造にあるといえる。先ほどの「破滅を前にした人類が子供を産むのは“罪悪”か!?”というテーマにしても、そうやって「破滅を前にした人類」という超現実的な前提をおくことによって、それは確かに価値観ではなく状況判断の問題とされる。しかしそれは結局「人類はどんな破滅を目の前にしているか?」という、「仮説提言系」の問題へと、議論の対象をズラしているに他ならない。元々は「どういう風に生きれば分からないのに、どういう風に生きるべきか決められなければならない」という矛盾を受け入れ可能にするために設定された超現実的な前提であったわけだが、しかしその超現実的な前提は前項で挙げられた「検証不可能なもの」ではありえない(検証不可能な不確かなものであったらそれが「生き方を考える」手助けにはならないだろう。幽霊が見えてもそれだけでは「生き方を考える」手助けにはならない)以上、必ず検証を受け、反論を受ける。そして、その反論と、反論を受けた超現実的な前提の矛盾を解消するために、また新たな超現実的な前提が設定され、そしてその前提についてまた議論が……というように、矛盾が次々と

再生産されていくなかで、当初の矛盾は忘れられる(このような現象は UFO についての議論でも見られる。木原[2006]参照)。逆に言えば、当初の矛盾にこだわらず、次々と新しい矛盾を再生産していくからこそ、この集団は前項における「1963～72 年生まれ世代・女性」集団より継続してオカルトを信仰できているのだ。もちろん、そこでさいていけず離脱する人々も出てくるだろうが、一旦この矛盾を再生産するオカルト信仰のメカニズムに首を突っ込んだ以上、それを離脱することは、それまで矛盾を再生産するためにため込んだ様々な知識を無意味とすることであり、心理的に大変難しい(オカルトについての心理学的説明でもよく言われる認知的不協和である)。

そしてこのような変化の結果、この集団のオカルト信仰はきわめて「データベース消費」化していると言える。「データベース消費」とは東[2001]が提示した概念で、現実とは完全に遊離された場所にそれぞれのサブカルチャーがデータベースを持ち、そしてそのデータベースを元にそれぞれが作品を作り出し消費するというサブカルチャー消費の傾向である。事実、雑誌『ムー』でも、投書欄どころか本文記事においても、その記事が情報源とするのは過去の『ムー』であったりし、雑誌『ムー』というデータベースの内部で議論が完結していることが、特に 2000 年代に入ってから多く見られる。

しかし一方でこのような議論の高度化は、その議論を知っている元から居る者にとっては当たり前であっても、初めてそのような議論に触れる者にとっては大きな参入障壁となっているのが現状である。このことについては「1978 年～生まれ世代」の項で詳述する。

3. 1973～77 年生まれ世代

「1973～77 年生まれ世代」の傾向は前項の「1963～72 年生まれ世代」とほぼ同じである。この集団はちょうど 1993 年にオカルト雑誌『ムー』を読み始めた世代であり、前項の「1963～72 年生まれ世代」をまさにお手本としてオカルトを信じてきた。特に、1993 年時点では彼らは 15～19 歳であり、それ故「1963～72 年生まれ世代」よりも人生経験が薄いため、より「生き方」の問題において超現実的な前提を求める傾向が強かったと言える。

4. 1978 年～生まれ世代

この世代はペンパル募集が終わる頃にやっと 22 歳になった世代であり、また投書も 2008 年になっても殆ど見られない。そのため傾向を考察することは非常に難しいが、一方で文章の投書はしないものの、イラストの投稿は行うことから、決して『ムー』を読んでいない訳ではないように思える。

しかし問題となるのがなぜイラストは送るのに投書をしないかということである。この要因には第一に「仮説提言型」が主流になったことによる、投書欄への参入障壁の高さがあげられるだろう。

「仮説提言型」というのはつまりそれまでのオカルトの議論を踏まえた上で、それに更に新しいものと組み合わせ、新しい議論をするというスタイルである。よって、それを行うためには、これまでのオカルトについて如何に知識を持っているかということが必要条件となる。もちろんこれは数年間ずっとオカルト雑誌を読んできた年長世代にとってはあまり大きな障壁とならないのだが、初めて雑誌『ムー』を読み始める読者にとってはきわめて大きな障壁となりうる。そして、1978 年～生まれ世代にとって、雑誌『ムー』の投書欄は、20 歳以前の頃からそのような「仮説提言型」が主流のものとなっていた。

そして更にそのような年長世代が投書欄の殆どを占めることにより、投書欄全体が年長世代の考え方に支配されるようになる。具体的に言う例を出すならば、「今の若者はダメだ」とかいう年長

世代からの若者論のようなことが前提とされた上で、その原因が何かということが議論されるのである。

これらのことが端的に表されているのが2000年11月号の投書欄において特集されたテーマ「キレる17歳」である。投書欄分析において示したように、このテーマでは様々な投書が寄せられたが、そのどれもが「若者はキレやすくなっている」ということを前提にした上で、その原因を考察するものであり、その考察においてはそれまでの『ムー』の記事の知識が多々引用された。そしてそのような形であるが故に、その投書欄周辺のイラスト投稿には多くの1978年～生まれ世代がイラストを寄せているにもかかわらず、そのテーマに投書をした10代は一人もいなかったのだ。

このような形で、1978年～生まれ世代は殆ど投書をせず、イラスト投稿のみを行っているのが現状だ。もちろん、イラスト投稿という形も投書の一環と言え一環だが、しかしそれは「矛盾の再生産」という、オカルト信仰を継続するのに重要なメカニズムを原理的に備える事が出来ない。文章ならともかく、イラストに対し検証したり反論したりすることは不可能だからだ。よって、2000年代に入ってイラストを投稿しているような1978年～生まれ世代も、そのオカルト信仰を『ムー』の中で継続することはほぼないのではないかと予想される。

5. 1958～62年生まれ世代

そして、前項のような若年層があまり投書欄で活発的に活動をしなくなった一方で、2000年代に台頭するようになってきたのが、2000年時点で38歳以上、2008年時点では46歳以上の「1958～62年生まれ世代」である。

この世代の特徴としてはまず「不思議発見型」、「仮説検証型」の投書をよく行うということ、そして第二に、そこで提示される内容には、日本の超古代史や「自由主義」を陰謀であるとして批判するという様な、ナショナリズム的な内容が多く見られたりすることである。

このような人々についての先行研究には、『〈癒し〉のナショナリズム』という研究がある(小熊・上野[2003])。『ムー』の投書欄における彼らの投書は、この先行研究で上野が「新しい歴史教科書をつくる会」の支部を調査したときに見いだされた「サイレント保守市民」が主張することとよく似ている。「サイレント保守市民」の特性、つまり、自分たちについて「普通に国や郷土を愛する人間」という自己像を持ち、そして国や郷土の誇りや伝統を汚すものとして「サヨクの陰謀」などを敵視しているが、しかしでは実際に何か運動を起こしてそのような状況を変えようとするかということとそうではなく、むしろそのようなことは「日常」を大事にしていらないから拒否感を持つというような特性は、この世代の投書にもとてもよく見られる。

では、このような人々はなぜ「超古代における日本」や「サヨクの陰謀」というような超現実的な前提を信仰するのか。その背景には「普通に日常を生きていれば尊敬されるはずである」という自己像と、それに反する「普通に日常を生活しているだけでは何も評価を与えてくれない社会」との間の矛盾であると言える。

1958～62年生まれ世代はぎりぎり年功序列・終身雇用などといった、高度経済成長期に標準とされた「中流」の生き方をしてきた世代であり、それ故90年代も、20代の間で就職氷河期やフリーター化などというライフコースの変化が起きているのに対して、相対的に安定した地位を確保してきた。

しかし90年代後半から2000年代に入り、地位自体は安定している一方で、自分たちが「標

準」であり「正しい」という自己イメージは危機に瀕するようになった。若年層が非正規雇用化する中で「正社員」のみが「正しい」という考え方は脅かされるようになり、また「妻は専業主婦で居るべき」という考え方も共働き世代の増加が目に見えて明らかになる中で脅かされ、むしろ「妻は専業主婦で居るべき」というような考え方は古いものとみなされるようになっていった

彼らには自分はそれまでそのように「まとも」に生きてきたという自己イメージがある。ところが社会においてはそれが「まとも」であるとはみなされなくなってしまっている。このような自分が自己の生き方に関して持つイメージと、社会が自己の生き方について思っているイメージが矛盾を起こしているのが、1958～62年生まれ世代なのである。

そこでオカルトは「陰謀論」などの超現実的な前提を設定することによりその矛盾を受け入れ可能にする。具体的に言うならば、「それは〇〇の陰謀である」という説明によって、社会はそのような陰謀に惑わされているから変な方向に向かっているのだと思ったり、あるいは「日本は世界を率いる神に選ばれた国なのだ」と宿命を信じることによって、現在日本が「日本らしさ」を失うようなあらゆる社会変動は間違いであると思ったりするのである。「1963～72年生まれ世代・女性」が、超現実的な前提によって「ありのままの私」を認めさせたのに対して、「1958～62年生まれ世代」は「ありのままの(私が生きる)国」を認めさせるのだ。

しかしその国はあくまで公的なものであるから議論の対象となり、それはやがて「仮説検証型」における矛盾の再生産へと移行していく。この様に「1958～62年生まれ世代」のオカルト信仰もまた、矛盾を受け入れさせるメカニズムとその矛盾を再生産するメカニズムが共に存在する故、今後も勢力を保つことが予想される。

二. それぞれの「オカルト信仰」の相違点と共通点

ここまで見てきた様に、一つの雑誌だけを見てもオカルト信仰は様々な形を取りうる。そしてその違いは大きく分ければ「どの様な矛盾が問題となるか」、「その矛盾が再生産されるか」という二つに分けられる。

ここまで述べたことを表にしたのが次の表である。

再生産の有無\矛盾の場所	社会における正反対の「女性像」	社会変動の中で相対化される自分	自己決定の困難さ
矛盾が再生産されない	「1963～72年生まれ世代・女性」		
矛盾が再生産される		「1958～62年生まれ世代」	「1963～72年生まれ世代」 「1973～77年生まれ世代」

横軸はオカルト信仰の原因となる「矛盾」がどこにあるかを示したものである。「社会における正反対の『女性像』」とは、「母として生きること」と「自己実現すること」の矛盾を示すものであり、「社会変動の中で相対化される自分」とは、それまで社会の中でまともな生きることによって肯定感を獲得してきた者が、それを今の変りゆく社会で否定されることの矛盾である。それに対し「自己決定の困難さ」とは、自己決定をなす根拠自体が分からないのに、様々な場面で自己決定を迫られていくことの矛盾であって、前者の二つは共に「元々あるもの」に対して生まれた矛盾であり、それ故受け入れ方も現状に対し肯定的・保守的となるが、後者は「あるべきものが存在しない」ことに対して

生まれた矛盾であるから、その受け入れ方も現状に対して破壊的となる。

そして縦軸はその矛盾が再生産されるかどうかを示したものである。これはそのオカルト信仰で信じられる「超現実的な前提」が検証していくことや反論していくことが可能であるかによって分類される。そしてそれが不可能である場合は、そのオカルト信仰は短期間で収束していくが、それが可能である場合は、オカルト信仰は継続性を持つと言える。しかし矛盾の再生産によりオカルト信仰が継続される場合は、その信仰は現実の矛盾とは遊離していき、オタク的な「データベース消費」に移行していく。

三. ここから何が言えるか

1. 「オカルト」的なものを信じるそれぞれの理由

「なぜ人はオカルトのようなことを信じるのか」という問いがなされるとき、通常そこでは「なんでそんな現実離れしたことを信じるのか」ということが問われる。そして、それに対する答えとして、人が如何に騙され、現実と非現実を間違えやすいかだとか、オカルトが如何に「超現実的」なものを科学的な「現実」と似せるかということが分析される。そこでは、オカルト信仰によって信じられる「超現実的な前提」そのものが議論の対象になり、オカルト信仰を説明できる要因とされる。

だが、これまでの分析からも分かるとおり、オカルト信仰は、確かに「超現実的な前提」を信じることによって成り立っているのだが、しかしその「超現実的な前提」は、ジャンル分析を見れば分かる通り短期間で変わっていくわけで、その「超現実的な前提」が具体的にどの様なことであるかはさほど問題ではないといえる。なぜなら、UFO や超能力・靈感、陰謀論などといった「超現実的な前提」は、それによって現実に存在する矛盾を受け入れ可能にするツールにすぎないからだ。オカルト信仰を持つ人達にとって問題となるのは、「超現実的な前提」それ自体ではなく、それを通じて受け入れ可能にされる、「現実の矛盾」なのである。

もちろん、その矛盾が具体的にどのようなものなのか、そしてそれがどの様に受け入れ可能にされるかということは、これまでに考察してきたようにそれぞれのオカルト信仰において大きく違うが、しかしその根本的な原因は「現実の矛盾」という一つに集約できるのだ。

もちろん、こうやって分析する側から見れば、彼らが直面している「現実の矛盾」というのは、しかし実際は矛盾ではなく、現実的に解決可能な問題だ。例えば「母になる」と「自己実現する」とことは、人達にとっては矛盾していることではあったが、しかし実際は社会が変わっていく以上旧来の「母親役割」というのはやがて解体していくことが予想されるし、そしてその様な変動の中で「母親」にならない選択肢や、「自己実現もきちんとする母親」という様に両方選択することが可能ではないかと、分析する側からは言える。しかし、それはあくまで分析する側が社会の構造や社会変動の要因などについて、それらを「現実」と認知しているから言えることであって、もしそのようなことについて知識がなければ、依然として「母になる」と「自己実現する」とことは矛盾として捉えられるのである。現に存在する「現実の世界」そのものは確かに完全に論理的に出来ていて、矛盾など一切存在しないかもしれない。だがしかし人間はそのような「現実の世界」全てを完全に認知することは出来ず、「現実の世界」の一部だけを見て、その情報を元に自分の中で「私にとっての現実世界」を想像せざるを得ない。そして、それが現実の一部だけを見て想像されたものである以上、その「私にとっての現実」は不完全であり、それ故矛盾も存在し得るのである。そしてその矛盾は、「現実の矛盾」である以上、それを受け入れ可能にし得るのは「超現実的な前提」しかないのだ。

しかし一方で、そのような「現実の矛盾」という説明項だけでは、一過性のオカルト信仰は説明できても、なぜそれが継続して信仰され続けるかは説明できない。オカルト信仰が問題視される理由としては、それが現実離れしたものであること以外にも、そのような信仰が一過性のものではなく、継続して信じられるという点にある。そこで新たな説明項として必要となるのが「矛盾の再生産」という構造である。この構造においては、「現実の矛盾」を受け入れ可能なものとするための「超現実的な前提」が、その内部に矛盾をはらんでいること、それが逆説的にオカルト信仰を継続させる要因となるのだ。逆に言えば、もし「超現実的な前提」が矛盾を生み出さないそれ自体で完結した完璧なものであるなら、そのオカルト信仰は継続性を持ち得ない。

故に、オカルト信仰に対して、その超現実性を批判する「反オカルト」的な言説は、実はそれこそまさに「オカルト信仰」を継続させる要因の一つなのだといえる。例えば「宇宙人は地球にやってきている」という主張に対して、反オカルト側が「いやそんなことはない」と反論することにより、オカルトを信仰する側には宇宙人に関する新たな情報や議論を行う動機付けが生まれるのだ。逆に言えば、幾ら「宇宙人は地球にやってきている」という信仰があったとしても、それに対して反論したり批判したりするものがいなければ、その信仰を維持するような行動をする動機は生まれず、結果としてオカルト信仰は衰退していくだろう。

従って、「これだけ社会から批判を浴びているのに、まだオカルトを信じている人が居るのは一体なぜなのか？」という問いは、問い自体に答えが内包されている。つまり、「社会から強い批判を浴びているからこそ、オカルトを信仰する人達は更に強くオカルトを信仰する」のである。

2. 先行研究における考察との違い

もちろんこれまでに述べてきたような考察は先行研究においても多々見られるものであった。しかし一方で先行研究においては、一つのオカルト信仰に注目しそのみを分析したり、考察される一つのオカルト信仰独自の性質をオカルト信仰全体に拡大したりするようなものが多くあった。それに対し今回の研究では、一つの雑誌の中で通時的にオカルト信仰を分析していくことにより、オカルト信仰にも様々なタイプがあり、そしてそれらの性質の中で何がオカルト信仰全体に言える共通点で、何が個々のオカルトにのみ言える相違点なのか示すことが出来たといえる。

例えば、オカルト信仰の背景には「ありのままの私」を認めて欲しいという欲求があるということ、は、靈感少女や前世信仰などについての先行研究でも言われたことだった。しかしこれは、80年代の「1963～72年生まれ世代・女性」についてのみ言えることであり、90年代以降のオカルト信仰においてはむしろ「ありのままの私ではダメであり、どう生きていくか考えることが重要」という風に、「ありのままの私」というものは否定された。そして、90年代以降の「1963～72年生まれ世代」、「1973～77年生まれ世代」においては、オウム真理教などについての先行研究(大澤[1996]、櫻村[2003])で指摘されたような、「超現実的な前提をすることによって自分の自己決定が出来るようになる」という機能がオカルト信仰には認められた。しかし一方でそのような生き方について考えるオカルト信仰は80年代のオカルトには見られなかったし、また98年以降の雑誌『ムー』に対しても適用できない。むしろ木原[2005]で指摘されるような「データベース消費」化が進展していったのが90年代後半からのオカルトだったのだ。しかしその一方でそのようなオタク趣味に留まらない、「サヨクの陰謀を批判し国家の誇りを取り戻す」というような保守的なオカルトというものも発生してきた。それを考察するに際しては、オカルトに対しての先行研究より、右派運動

に対しての先行研究(小熊・上野[2003])が参考になるといえる。

このように、一口にオカルト信仰と行ってもそこには様々なタイプのオカルト信仰があり、一つのオカルト信仰のみを分析してもそれがオカルト信仰全体について言えると言うことは出来ない。しかし、こうやって様々なオカルト信仰を比較しながら分析していく中で、それぞれのオカルト信仰は確かに内実は大きく異なるが、しかしいずれにせよ、「現実の矛盾を受け入れ可能にする」という機能があること。そして、継続するオカルト信仰には「矛盾を再生産する」という構造があることが、共通点として見いだせた。これは、通時的に様々なオカルト研究を比較分析していった、この研究独自の考察である。

第5章 まとめ

最後に、この研究から一体どのようなことが言え、逆にどのようなことが分からなかったか結論を述べ(一. 結論)、そしてそこからオカルトに関する様々な議論に対し提言をする(二. 提言)。そして最後に、今回の研究では十分に考察できなかったことを今後の課題として提示する(三. 今後の課題)。

一. 結論

この研究では「人はなぜオカルトを信じるのか」という問いを考えるために、「現実の矛盾を受け入れ可能にする」という原因論的アプローチと、「矛盾の再生産」を行う構造論的アプローチが可能なのではないかと仮説を立て、そしてその仮説を雑誌『ムー』のドキュメント分析によって検証していった。そしてその結果、オカルトについて、それはオカルト信仰それぞれによって様々な形態を取るものの、「現実の矛盾を受け入れ可能にする」という機能がオカルトを信じる人達に果たされていること、そして、継続するオカルト信仰には「矛盾の再生産」という構造が見いだせることが共通していると検証でき、そこから、「人はなぜオカルトを信じるのか」という問いに対し、「現実で発生する様々な矛盾には超現実的な矛盾でしか対処できないから」という原因論的理由と、「矛盾が再生産される構造があるから」という構造論的理由が提示できた。

ただ一方で、これはあくまで雑誌『ムー』におけるオカルト信仰に限って検証できたことであり、雑誌『ムー』以外の場所で現れるようなオカルト信仰にそのような理由が適用できるかは、この研究では検証できなかった。特に90年代からオカルトの大きな潮流の一つであったニューエイジやスピリチュアリズムなどについては、雑誌『ムー』においてはあまり取り上げられておらず、そのようなものを信仰する人々についても、『ムー』ではなく別の雑誌を読んでいたりにするために、雑誌『ムー』のドキュメント分析から考察することは不可能だった。そのため、この研究によってオカルト信仰全体を分析することは、出来なかったと言わざるを得ないだろう。

二. 提言

前項で述べたようにこの研究はオカルト研究としては不十分な点が多々ある。しかしそれでもこの研究の結論はオカルトに関する議論に対してある程度の提言は出来るだろう。

オカルトに関してはこれまでも、オカルトのような非科学的なものを信じていては、その人が不利益を被るし社会全体にも悪影響を与えたとした、「ニセ科学批判」や「トンデモ批判」に代表されるオカルト批判論や、それに対し、オカルトへの信仰は再び人々に神や世界に対する畏敬の念が出てきた現れであると捉えたり、オカルトを信じることによってその人達が幸せになれるのだからそれで

良いじゃないかと捉えたりするオカルト肯定論など、様々な議論がなされてきた。

だが、そのような議論全般にまず言えることとして、それらはいずれも、オカルト信仰を単一の物と捉え、UFO 信仰も超能力信仰も心霊信仰も、一つの論理で説明できると考えているものが多い。しかし実際は、この研究が明らかにしてきたように、オカルト信仰にはそれぞれ異なる構造があり、それを信じるに至る理由にも様々な理由があるのだから、多々あるオカルト信仰を「科学の権威を悪用しているから」とか「死への不安を和らげるため」、「人には超越的な物を感じる感性があるから」というような単一の具体的理由で説明することは出来ないということを、まずは認識するべきだろう。

そしてそうである以上、個々のオカルトに対し、肯定的にせよ否定的にせよ関与しようとするならば、まずはその個々のオカルトがどのようなメカニズムによって信仰を獲得しているか(具体的に言うならばどのような「現実の矛盾」がそのオカルト信仰の背景にあるのか)、そして、そのオカルト信仰には継続性があるのか、あるとしたらそれはどんな構造によって維持されているかを、その個々のオカルト信仰を分析することにより把握し、そしてその把握から、自分のやろうとしていることが、本当に自分のしたい目的と合致しているか検証してみる必要があるだろう。例えばオカルト批判論はよく科学的な知によりオカルトの超現実的な前提を批判したり、あるいは「オカルトを信じている人は危ない／ダサイ」というような社会的イメージを作り出そうとしたりするが、それはまさにオカルト信仰における「矛盾の再生産」に寄与する行為であり、オカルト批判としては逆効果なのである。一方オカルト肯定論においても、例えば「オカルトは人々が超越的な力をきちんと認めるようになった現れだ」という論がなされたりするが、しかし実際は別に超越的な力そのものがオカルト信仰の直接的な原因ではなく、実際は「正社員となって働くか結婚相手を見つけて主婦となるか」というような、極めて現実的な悩みがオカルト信仰の理由であり、超越的な力というような「超現実的な前提」はその問題を受け入れ可能にする単なるツールに過ぎなかったりする。「オカルト信仰なんて若い内のはしかみたいなもので放っておけばすぐに消滅する」というオカルトを消極的に容認するような議論も、「1963～72 年生まれ世代・女性」のような矛盾を再生産する構造がないオカルト信仰には妥当だが、90 年代以降のオカルトのように矛盾を再生産する構造が生じる場合は妥当ではないといえる。また、「オカルトが社会にとって危険かどうか」というオカルトについての議論で良くなされるテーマについても、それは個々のオカルト信仰によって違うといえる。考察でも述べたが、「1963～72 年生まれ世代・女性」や「1958～62 年生まれ世代」は現状肯定型だが、80 年代後半から 90 年代前半の「1963～72 年生まれ世代」、「1973～78 年生まれ世代」においては、むしろ終末論のような、現状破壊型のオカルト信仰であったのだ。

そして、オカルトを議論する際に、その議論が肯定派によってなされるか否定派によってなされるか問わず一番重要なことは、オカルト信仰は確かに「超現実的」であるが、その「超現実的」なことが求められる背景には、必ずその当人達が、「現実の矛盾」をいかに受け入れるか悩んでいるということである。

確かにオカルト信仰は表面的に見れば「超現実的な前提」への信仰である。しかしそれはあくまで、「現実の矛盾」を受け入れ可能にしようとすることによる結果なのであって、オカルト信仰自体の源泉は、やはり「現実の矛盾」なのだ。そうである以上、もしオカルト信仰を批判しようとするのであれば、そこではまず結果ではなく原因・源泉をなんとかすべきなのだ。つまり、「現実の矛盾」に対し、それを矛盾でなくすような、「別の現実」のとらえ方を提示するのべきなのである。例えば「母となるこ

と」と「自己実現すること」との矛盾が源泉ならば、その二つは排他的な関係ではないし、何よりこれからの社会においては自己決定こそ重要視されるようになるだろうというような「別の現実」を提示したりすればいい。他にも、「人は特別でなければ価値がない」のに、「私は特別ではない」という矛盾から超能力や靈感・前世を信仰するようなオカルト信仰に対しては、「特別ではない者にも価値を与える場所はある」というような「別の現実」を提示したりするだろう。もちろん、それが当人達に説得力を持って受け入れられるかどうかは、その議論の戦略次第わけだが、しかし少なくとも議論の方向性としてはそのような形でしか、実効性のあるオカルト批判はありえないだろう。

三. 今後の課題

最後に、今回の研究では十分に調査できなかったオカルト信仰について、「1963～72年生まれ世代・女性のその後とスピリチュアリティ」と「1958～62年生まれ世代における右派運動とオカルト信仰の結合」、そして「1978年～生まれ世代における新しいオカルト信仰」という三つのオカルト信仰を今後の研究課題として提示する。

この研究において「1963～72年生まれ世代・女性」は、10代である80年代はオカルト信仰を持っていたが、90年代になるとそのオカルト信仰はみられなくなったと分析した。これは、雑誌『ムー』においてこの集団が見られなくなったことから推測したことだが、一方で櫻村[1998]などによれば、この世代の女性は90年代後半から勢力を拡大した、ニューエイジやスピリチュアリティ信仰の担い手でもあるらしい。このニューエイジやスピリチュアリティに関しては雑誌『ムー』ではあまり取り上げられないテーマであり、投書欄においても注目はされないテーマだったため、雑誌『ムー』のドキュメント分析からその内容をうかがい知ることは出来なかったが、しかし「超現実的な前提」を信仰するという点では、紛れもなく今回の研究における「オカルト」の定義と合致するものであると言える。これらのスピリチュアリティ信仰については、先行研究も多々あるが、今回の研究で用いた「現実の矛盾を受け入れ可能にする」という機能と、「矛盾を再生産する」という構造が存在するかどうかという視座から、研究の余地はまだあると思われる。

また、オカルトに関する先行研究ではあまり触れられないが、近年のオカルトにおいては、80年代以降主にオカルトを信仰してきた「1963～72年生まれ世代」より更に上の、「～1962年生まれ世代」が、雑誌『ムー』の投書欄などにおいても多く登場するようになってきている。そして、この世代に限って事ではないが、2000年代頃からオカルトにおいて顕著に見られるのが「イエスキリストが日本に来た」や「日ユ同祖論」などの超古代史や、「ロスチャイルド家が世界を牛耳っている」というような陰謀論である。

これらの超古代史や陰謀論は別に昨今になって急に現れてきたものではなく、雑誌『ムー』においても昔から扱われてきたテーマではあるが、しかし重要なのはその内容がより国家主義的になりつつあるということである。その様な国家主義的オカルト信仰は、「新しい歴史教科書をつくる会」や、その他様々な右派運動によって主張されることと、とても類似していると言える。

このような右派運動と軌を同一にするようなオカルト信仰を研究することによって、右派運動の背景にも、オカルトと同じような「現実の矛盾を受け入れ可能にする」機能や、「矛盾を再生産する」構造が見いだせるのではないだろうか。

最後に、今回の研究では「1978年～生まれ世代」のオカルト信仰については殆ど考察しえなかった。それは第一にこの世代の投書などが殆ど見つからなかったことによるものだ。イラスト投稿は

多少するが、しかしそれにしても数は他の世代と比べて少ない。では彼らはもはや自分たちの前の世代のようにオカルトを信仰することはないのだろうか。

しかし一旦雑誌『ムー』から離れ、このような若年層のオカルト信仰について調べてみると、決して彼らがオカルト的なものを一切信じていないわけではないことが分かる。香山[2006]に引用されている研究によれば、小中高生の二割が、「一度死んだ生き物が生き返ることがあると思うか?」という問いに「生き物は死んでも生き返る」もしくは「生き返ることもある」と答え、香山が大学1、2年生に「心理学」の授業でアンケートを採った際には、24%が「一度死んだ人が生き返ることがあると思うか?」という問いに「ある」と答え、「魂や霊魂があると思うか?」という問いには61%が「ある」と答え、「前世や生まれ変わりを信じるか?」という問いには56%が「信じる」と答えた。この結果からはやはり、若年層においてもオカルト信仰は存在するということが言えるだろう。

このような若年層のオカルト信仰がよく表われるものにサブカルチャー作品がある。例えば香山は「生き返り」をテーマにした作品を著書の中で多く挙げて、「死後の世界」という考え方が人々に浸透していることを提示するし、香山が提示する作品以外にも「生き返り」的な作品は多々あり、若年層の中で人気を集めている。その中で私が注目するのは、『ひぐらしのなく頃に』という作品である。

『ひぐらしのなく頃に』という作品は2002年頃から発表された作品で、元々はPCゲームだったのだが、人気が出るにつれアニメ化や漫画化などがなされた、若者に人気の作品である。

ストーリーは昭和50年代の山村で起こった連続怪死事件を解決するという内容なのだが、特徴的なのはその作品の推理の仕方が「一度事件が起こって殺された後、またもう一度その人生をやり直して何度も事件を経験することにより、事件解決の糸口を見つけ出す」という方法をとっていることにある。つまり、生まれ変わってもう一度やり直せることができるのであり、「生き返り」的な作品の一つとすることが出来るだろう。

そして、そのような生き返りを繰り返していく中で、事件の真相として明らかになるのが、「UFO」や「神様の祟り」といったオカルト的な妄想を持った人間がこの事件を引き起こしていたという事実である。つまり、この作品では一旦、「オカルト的なことなんて現実には起こるわけがない。全ては結局現実的に理性によって解決できるのだ」という風に、オカルト批判的なスタイルにより事件の真相が分かるようになる訳である。

ところがそれでもなぜか連続怪死事件は起こる。そしてそこで更に推理がなされる内に、今度は否定されたはずの「神様」が表われてきたり、「宇宙人」は出てこなくても「謎の病原菌」や「政府の陰謀」というような別の陰謀論が現実として表われてきたりする。そしてこの作品のストーリーはそのような陰謀に如何に立ち向かうかという方向に流れていき、ついにはその陰謀を「神様」と一緒に撃破するという展開になるのである。そして最後には「奇跡はみんなか信じれば叶う。みんながそれを願えば、みんなが幸せになる道はある」というような、スピリチュアリズムでも良く語られるようなメッセージが語られるのだ。

この作品が示唆的なのは、一旦作品内で「神様の祟り」や「宇宙人」といった、雑誌『ムー』的なオカルトが一旦完全に否定され、しかしその後にもまた新しいオカルト的なものが表われ、肯定されるという点にある。現在、雑誌『ムー』のようなオカルト雑誌を読んだり、オカルトを信じたりしていることはとても「恥ずかしい」という意識が若者の間にはある。だから一旦旧来の「オカルト」は否定さ

れなければならないのだが、しかしそれでも「超現実的な前提」は必要とされるが故に、旧来のオカルトとは種類が違う(けど本質的にはオカルトであるもの)が表われるのである。つまり、雑誌『ムー』のような旧来のオカルトは信頼に値しないけれど、それでも「オカルト的なもの」は信じたいという若者の意識が、『ひぐらしのなく頃に』が若者に人気となった背景にあるのではないだろうか。

だとしたら、やはり若者の間では未だオカルト信仰、あるいは「超現実的な前提」を求める心性はあるということだろう。そして、その背景には、それでないと受け入れられないような「現実の矛盾」が存在することが推察される。この作品でいうならば、「奇跡を望む」にも関わらず「それが叶うかどうか分からない」ということが、「強い願いは世界を変えられる」という超現実的な前提によって受け入れ可能なものとされるメカニズムは、まさにオカルト信仰のメカニズムと一緒であると言える。

この様な若者における新しいオカルト信仰は、今後も研究が必要だろう。

おわりに

雑誌『ムー』のドキュメント分析を行い、特に投書欄の分析をしていた時に一番感じたことは、オカルトを好きな人には、本当に真面目な人が多いんだなあということだった。そして、真面目だからこそ、今の社会に何かしらの違和感を持ち、オカルトにのめり込んでしまうのかなあと思った。正直言って、僕はそこまで真面目な人間ではないので、あまり投書などに同調することはなく、どちらかというところ立ってしまうことも多かったが、しかしだからこそオカルトから距離を取って研究が進められたのかなと思う。それに、何だかんだ言ってオカルトの突飛な発想というのは面白い。真面目に「人類なんて滅亡しちゃうのに赤ちゃんを産んで良いんでしょうか」と問いかけるというのは、面白いなあと感じる一方で、そういう風に悩んでしまうというのは当人にとっても辛いのだろうなと思ったりもした。オカルトを信じるにしろ信じないにしろ、そういう真面目な人が幸せに生きられれば良いなと祈ったりする。

最後に、この研究に当たって指導を担当して頂いた荻野達史先生、そして卒論ゼミの同輩や、中間発表会で指摘を抱いた静岡大学人文学部社会学科社会学コースの先生達などに、深く感謝いたします。

参考文献

- エミール＝デュルケム、古野清人訳、1941-1975『宗教生活の原初形態』岩波書店
ゲオルグ＝ジンメル、清水幾太郎訳、1979『社会学の根本問題』岩波書店
トーマス＝ルックマン、赤池憲昭・ヤン＝スインゲドー訳、1976『見えない宗教』ヨルダン社
マックス＝ウェーバー、大塚久雄訳、1989『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店
浅羽通明、1991『天使の王国』JICC 出版局
東浩紀、2001『動物化するポストモダン』講談社
飯倉義之、2006「〈霊〉は清かに見えねども」(一柳廣孝編『オカルトの帝国』青弓社)
一柳廣孝、2006「オカルト・エンターテインメントの登場」(同上)
大島丈志、2006「『ノストラダムス』の子どもたち」(同上)
金子毅、2006「オカルト・ジャパン・シンドローム」(同上)
井門富二夫、1997『カルトの諸相(叢書 現代の宗教)』岩波書店

人はなぜオカルトを信じるのか

- 大塚英志、1989-2001『定本 物語消費論』角川書店
- 大塚英志、1996『「彼女たち」の連合赤軍』文藝春秋
- 大澤真幸、1996『虚構の時代の果て』筑摩書房
- 大村英昭、1996『現代社会と宗教(叢書 現代の宗教)』岩波書店
- 小熊英二・上野陽子、2003『〈癒し〉のナショナリズム』慶應義塾大学出版会
- 落合恵美子、1994-2004『21世紀家族へ』有斐閣
- 櫻村愛子、2003『「心理学化する社会」の臨床心理学』世織書房
- 香山リカ、2006『スピリチュアリズムにハマる人、ハマらない人』幻冬舎
- 菊池聡、1999『超常現象の心理学』平凡社
- 木原善彦、2006『UFOとポストモダン』平凡社
- 近藤雅樹、1997『靈感少女論』河出書房新社
- 斎藤貴男、1997-2000『カルト資本主義』
- 櫻井義秀、2009a「人間関係への嗜癖としての回心―「摂理」と学生・青年信者」(櫻井義秀編著、2009『カルトとスピリチュアリティ 現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房)
- 櫻井義秀、2009b「現代日本社会とスピリチュアリティ・ブーム」(同上)
- と学会編、1995-1999『トンデモ本の世界』宝島社
- 島藺進、2007『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』岩波書店
- 高田里恵子、2005『グロテスクな教養』筑摩書房
- 高橋紳吾、1997『超能力と霊能者』岩波書店
- 吉峻貞信、1990「オウム真理教入信体験日記！」(別冊宝島編集部、1990-2000『いまどきの神サマ』宝島社)
- 新山哲、1990「人類救済の戦士たちはチョコパフェが好き！」(同上)
- 米本和広、1997「グルになったセミナー屋さん」(別冊宝島編集部、1997『洗脳されたい!』宝島社)
- 宮台真司、1998『終わりなき日常を生きろ』筑摩書房
- 宮台真司、1993『サブカルチャー神話解体』パルコ出版
- 宮台真司、1994『制服少女たちの選択』講談社
- 太田妙子・吉川茂「大学生にみられる超常現象志向に関する基礎研究(文化編)」『大阪外国語大学論集』18巻、281-292項、1998
- 櫻村愛子、1998「個人インタビュー調査から見た精神社会の社会性」(『愛知大学文学論集』)
- 坂田桐子・岩永誠「超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究(2):社会・心理的要因の影響を中心に」『広島大学総合科学部紀要―理系編』24巻、87-97項、1998
- 菊地誠、「ニセ科学入門」http://www.cp.cmc.osaka-u.ac.jp/~kikuchi/nisekagaku/nisekagaku_nyumon.html(アクセス日:2010/01/04)
- 文部科学省「大学・短期大学の規模等の推移」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/pdf/67.pdf(アクセス日:2009/12/30)